
心の情景

星桜なつき。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の情景

【Nコード】

N0112F

【作者名】

星桜なつき。

【あらすじ】

絵に描かれた女の子を好きになった男の子。そんな彼の前に一人の女の子が現れる。

プロローグ

『どうしたの？』

（ん？ああ。ときどき俺、自分が嫌になる事があって）

『どうして？』

（だってそうだろう？俺は君にしかこうして心を開いていない）

『そんなことないよ。わたしだけじゃなく、あなたには友達がいる』

（そうだな。でも、その友達には今までの俺でいたいんだよ。だから俺はこうして君と話をする。こんな話は君にしかできないことなんだ。そうして俺は、今までの気持ちを持っていたいんだよ）

『今のあなたと、昔のあなたではちがうの？』

（ちがう……かもしれない）

『うん。それなら大丈夫だよ』

（どうして？）

『ひとは変わらないと生きていけないものでしょ？ずっと同じままだなんて、それはそのひとにとってもつまらないことじゃないのかな。けどあなたはいいほうに変わってきていると思う。だから、大丈夫』

（そうかな）

『うん。だって、あなたは以前よりも周りのことに気を使うようになったよ。迷惑をかけないようにって』

（ああ……そうかもしれない）

『うん。だからすくなくても、そう考えてあなたは今を生活しているでしょ？わたしをこうして見つめてくれて。だから大丈夫。あなたは、それくらいがんばっているもの。だって、わたしはいつもあなたを見ているんだから』

（そうだな。俺はなんとか頑張っているんだよな、リサ……）

俺の両親が亡くなった。

俺がその時その場所にいる事ができれば、実感として沸いたのかもしれない。でも実際、目の前にある二人を見た時は実感が湧かなかった。初めて鏡を見せられて、これがあなたなんだよ、と言われた時の気持ちに似ていた。それが自分なんだってわかるのに、自分の思っていた映像とかけ離れていて、それを見ている自分の現実になんて納得できない。

他人から聞かされた情報なんてそんなものだ。

なにしろ、俺がこの目でそうなったコトをみていないのだから、みんなして俺にタチの悪い冗談を見せているくらいの認識だった。いや、きつとその時の俺は、これからのことを想像するに容易なコトを、認めたくなかったんだ。

これが実際に起こっていることなんだって、認めたくなかったんだ。

だから、それが来たのは、ずいぶん経ってからの事だ。

あの時に他人達から聞かされた、憐憫の言葉の意味。

いつも行く学校も、俺の友人達も、今までとないにも変わらずに俺に振舞ってくれる。今までと変わらない毎日が続いていく。

俺を取り巻く外の環境　外見は何も変わっていない。

その俺の外見を見たとき、どうしようもないほどの、どこにも向けられない、終わる事のない、むなしさと、寂しさと、心細さがあることを知ったのだ。

ここでの俺は、一人だけ。

とりあえずの何かしらの目標……、心を始めとしているんなことの支えとしてくれていた両親。それがもう、いないのだという現実。そのことを知り、じわりじわりと俺の心を蝕み、胸をかきむしりたくなるような後悔に似た感情。

これが、絶望というヤツなのだろう。それを嫌というほど感じてしまった。

だけど、この俺を取り巻く外の環境だけは変わらずにそのまま続けたかった。このむなしさと寂しさと心細さを外見にぶちまけ、俺を取り巻くこの外の世界まで壊したくはなかった。

今の俺は、昔の俺のまま認識してくれる世界に俺はまだ頼りたいのだ。

でも、両親が亡くなってしまふ前の自分と同じようには、もう振舞うことはとても困難に思えた。

例え無理をするにしても、そこまで器用にすぐ自分を変えることなんて俺にはできるわけがないのだ。

だから、なにか一つでも、新しいものを見つけ出したかった。見つけ出して、この一人である世界からの現実逃避する理由を作ろうとしたかった。現実逃避して、俺の気持ちを外見に現させないようにしたかったのだ。

いや、現実逃避じゃないな。俺はきつと、なにかにすがりたいのだと思う。これからの自分の目標になるようなものを見つけ、それをずっと目指しつづけたいのだ。

そうでもないかと、この寂寥感をぬぐえなく、これから一人で生きていけない。そう思ったのだ。

だから、探した。

俺の知らない、まだ聞いたこともなかった、両親が俺に望んでいたようなことを。

それは、両親の本意じゃなくてもいいのだ。

ただ、俺は今これにがんばっているのだから、大丈夫だと、自分自身に納得させたかっただけなのだ。

そんなときだ。

俺にこの道を歩ませるきっかけを見つけたのは。

それは、家の奥にあった、ほこりだらけの倉庫の奥で見つけた。

半ばゴミのようながらくたの中にうもれていた、茶色い布に包まれた1枚の四角い板。

ほこりだらけのその布から出てきたものは、学校で使っている机

くらいの大きさの、一枚のキャンパスだった。

そのキャンパスに描かれていた絵を見て、俺はとても驚いた。

俺はしばらく、その女の子に見惚れてしまっていた。

妖精か？それとも女神？

とても美しい女の子が、そこにいた。

茶色の丸い大きな帽子をかぶり、そこから流れる長い黒曜石を溶かしたような黒髪がよく目に映る。風になびいているさらさらの髪は輝いて、闇夜に輝く天の川のようなうだ。

横を向き、遠くの景色を見つめているその瞳の虹彩は、春の生き生きとした木々の葉を思わせる深い緑。どこか遠くを見つめているのに、俺を見ているような気もしてくる。とても優しく、こうして見ている俺に、全てを任せきった、安心したような笑顔をみせていた。その美しい緑のなかに、俺は吸い込まれていくようだった。

季節は冬、だろうか。バックは淡いグレーの雲に覆われて、彼女の周りには白く煙るような雪が舞っている。暖かそうなチエックのマフラーを巻き、その雪にも負けないほど白い肌の小さな指は、風で舞いそうな帽子をそっとおさえていた。

年齢は今の俺と同じくらいか。少女のあどけなさが残っているのに、女性の燐とした美しさも兼ねそろえていた。

「 r i s a 」

そのキャンパスの右隅に、その文字があった。

（リサ……？）

それが、これからの俺を変えてくれた、この絵の女の子、リサとの出逢いだった。

日常

「おい、大樹。帰ろーぜー」

「ん、ああ、胡太郎。ちょっと待ってな」

4月も半ばに入り、暖かな春の日差しから襲ってくる睡魔と闘う授業が終わった今日の放課後。

俺はいつものように自分の席に座り一枚の絵を見つめていた。

そこに俺の親友、『吾妻胡太郎^{あづまこたろう}』が声をかけてきた。

「なんだよ大樹。まだ帰り支度もしてないじゃないか。もう誰もいないぞ。さっさと行こうぜ。こんな所にいてもつまらん」

「ああ、そうか。もう誰もいないのか」

そう言われてあたりを見ると他のクラスの連中は誰もいなくなっていた。俺は絵を見ながら物思いにふけていたので、周りの様子はわからなかった。

授業が終わってももうずいぶん経っていたらしい。

「大樹。なんだよ、まだその絵を見ていたのか？」

「ん？ああ」

「あれからずっと見ていたのか？よく飽きないな」

「ああ。惚れているからな」

俺が見ていたのは、あの時見つけた 黒い髪、緑の虹彩を持つ女の子 リサの絵だ。俺はこうしていつもあの絵を小さく写した物を持ち歩いて、暇さえあれば見つめていた。

リサを見つめていると、俺の心の中でリサと話をしているような感覚が生まれて、励まされたような気持ちになってくる。おかげで俺の寂しさを紛らわす事ができていた。さっきもそんなふうに物思いの中で話をしていた。

このリサの絵の事を知っているのは胡太郎だけ。胡太郎とは幼なじみで俺のことをよく知ってくれている。その為、俺のこんな変な性癖もある程度は許容してくれているようだ。

「それにしても大樹。そんな絵の中にいる現実にはいない女の子に恋するなんてなあ。俺には青春を無駄にしているようにしか思えんぞ」
「そうか？」

「そうだ。まあ、確かに、その絵の女の子はかわいいさ。でもな、健全な男だったら、実際の女の子にアタックするべきだ。女の子はいいぞー。柔らかいし、あったかいし。それになによりきもちいいし。絵の女の子とは違っていろいろとしやべってもくれるぞ。どうだ？そんな絵なんか捨てて実際の彼女でも作ったら。願ってもかなわない事に時間をかけるなんて全くの無駄だぞ」

まあ、許容してくれていると言っても、こんな冗談めいたからかいの対象にはするが。

「お前はそうはいうけどな、リサだって、色々話をしてくれる」
「話す？」

「ああ。話してくれる。リサを見ているだけで、俺とリサは心の中で会話できるんだ」

「へえ。どんな？具体的に説明してみろよ」

「うーん、説明するのはちょっと難しいな。俺が何か言うとそれに相槌をうつというか、アドバイスをくれたりとかだな」

「ああ、そうかい。でもそんなこと、お前を知らないヤツが聞いたらおかしいやつだと思われるぞ」

「そんなことは百も承知さ。いいんだ。リサがいてくれるのなら」

「はー、いくら言ってもわかってくれないなー。まあ、いいか。絵を見ているだけなら誰も損はしない」

「ところで胡太郎、今日は女の子の方はいいいのか？」

「なんだよ。もう忘れたのか？俺は今日もさつき組の渡辺に誘われたのだけど、お前のたまにある部活の休みのときくらいはお前とだべってもいいと思ったから、誘ったんじゃないか」

「あ、そうか」

胡太郎は結構見てくれが良いので、クラスの内外問わず女子達によくもてている。昔はよく遊んだものだが、今では俺と遊びに行く

なんて稀になっていた。

それでも、こうしてたまに誘って遊びに出かけたりはする。

「まったく、大樹は友達がいのないやつだ。せつかく面白い情報も教えてやろうと思ったのにさ」

「わかったよ、帰ろう」

「よし、親友。それでは、いつもの所に参りましょうか」

俺はリサの絵を胸のポケットにしまい、帰り支度をした。

こうして、いつもの商店街でゲーセンやら、CD屋やら、色んな所を胡太郎とぶらつくことになった。

いつも思うのだが、胡太郎は俺のような男とこうして街を歩くのは嫌じゃないのだろうか。せつかく女の子とっしょにいられるのならそうすればいいと思うのだが。

そう訊くと胡太郎は、

「ああ、そんなこと決まっている。女の子と街を歩くときは、基本的に女の子にあわせないとダメだろ？だから男と一緒にいる時は女の子を連れて行けないような俺の好きな所にいけるからいいんだ。大樹だと変に気を使うこともなく何処にでもいけるし、これはこれで別の楽しみがあるさ」

と言った。

まあ、どんな理由であれ、いつものようにこうして胡太郎と冗談やからかい合いをするだけでも、俺にとってはありがたいことだった。

多分、口では言わないけれど、俺のがそう思っていることを知っていてそうしてくれているのだろう。胡太郎はそういうやつだ。

だから、女の子にもてるのだろうか。

「で、胡太郎、さっき何か面白い情報があるとか言っていなかったか？」

「あ、そうだ、忘れてた。森村君。これはなかなかいい情報だぞ」
「なんだよ」

「今度転校生が来るんだってさ。うちのクラスに」

「転校生？」

「しかも女の子だって言うはなしだ」

「ふーん」

さすがに胡太郎はこういう話にはめざとい。

「そこで、さっきの話になるわけだ」

「さっきの話？」

「お前が彼女を作る、だ」

「なんで？」

「転校生、しかも女の子ときたらかわいいに決まっている。そんな女の子を放っておくなんて手は無い」

「だから、なんで俺なんだよ……」

「ドラマチックで面白そうじゃないか。転校してきたヒロインが主人公の隣の席になって、初めての学校に不安になるヒロインに主人公は優しく声をかけて、そのうちに二人は恋に落ちて……。かー。いいシチュエーションじゃないか、まったく。男となったからには学園生活に是非一度はそんなシチュエーションを味わってみたいと思わないか？」

「はいはい。女の子の事は胡太郎に任せるよ」

「何を言っているんだ。お前は結構見てくれ　容姿は悪くない。だからクラスの女子もお前の事は悪く思っていないんだぞ。真面目で一生懸命なお前はむしろ好意的にも思われている。まあ、俺には遠く及ばないけどな。だから、そんなことを言って、チャンス逃さないようにしろよ。そうしたチャンスは有効に使わないとダメだぞ、森村君」

「チャンスを有効に使えと言う言葉には賛成だけど、俺に彼女、恋人はいいよ。女の子が俺のことをどう思っているかとかはともかく、俺から女の子に話し掛けることなんて恥ずかしくてとてもできない。俺に彼女をつくるなんて無理だ。だから俺にはリサがいてくれればいい。それに今はこれからの将来の事で頭がいっぱいでさ。他の事までは頭が回らないよ」

「というか、俺は女の子に対して少し苦手意識がある。それは胡太郎にも話せないようなことなのだ。」

「将来の事？ああ、そうか。お前は絵の才能があったから、その道を目指すって言うていたな」

「ああ。今度近いうちに特待生を選ぶコンクールみたいなものがあるんだ。そこでがんばって、俺もこのリサのような絵を描いてみたいんだ。そして……」

「そっか。頑張れよ。恋人ができればその子の為に、夢に向かう努力も万倍にもなるだろうし、ナ」

胡太郎は俺の肩を叩きながら嘯く。

まったく。冗談なんだか、本気なんだか。

「胡太郎はどうするんだ？そろそろ進路、考えないといけない頃だろ？」

「俺か？どうだろうなあ……」

「女の子に手を出すは良いけど、俺はそっちの方が心配だ。まあ、胡太郎は頭がよくて成績もいいけどさ。素行とかで目をつけられているんじゃないのか？」

「ふふん。俺はその気になったらホストにでもなるからいいのさ」

「ホスト？あ、そうか、その手があったか。胡太郎にはぴったりだな。天職だ」

「って、おい、本気にしないでくれよ」

「なんだ、違うのか」

「ああ、もうわかったよ。大樹の言うように俺はホストを目指すさ。たくさん女の子を幸せにできるからやりがいのある仕事だしな。よし、指名度ナンバー1は俺のものだ」

胡太郎はそう言いながらシニカルな笑顔をして親指をぴっと立てた。

「ああ、頑張つてな」

「大樹もな」

きつと胡太郎は俺のことが心配なのだろう。

胡太郎の経験からして、俺に女の子がいれば俺も少しは寂しくなくなるだろうなんて思ってくれているのかもしれない。

でも、案外、こんなオクテな俺に彼女ができるのを楽しみに見ていただけなのかもしれない。そんな俺を見てからかいの対象にしたいだけなのかもしれない。

そういうヤツなんだ、胡太郎は。

でも、ありがとうな、胡太郎。

「ただいま……」

胡太郎と別れて、誰もいない、冷たく暗い静かな家に帰る。

学生の一人暮らしだと言えば聞こえがいいだろう。例え両親と離れて暮らしたいと思う奴がいても、本気で両親がいなくなってしまうばいなんて思うことは多分、ないはずだ。

俺の両親は、一年くらい前、事故で亡くなった。

なんでも、俺がいないときに二人でドライブ中、居眠り運転のトラックに正面衝突されたとか。

即死だったらしい。

そのことを知らされたときは、両親が亡くなったということに実感が持てなかった。

両親はさすがに俺より早く亡くなってしまうとは思うが、こうも突然に、しかも両親が一緒になんてとても現実で起こっていることだなんて、にわかには信じられなかったのだ。

いや、信じたくなかった。認めたくなかった。

両親が死んでしまったと実感が出てきたのは、一人で生活するようになってしばらくしてからだ。

誰もいない、いつもいるこの家の、リビングルームや、台所、寝室……。

広くて、部屋がたくさんある家に、一人きり。

「ここと毎日向かい合っていたら、もう両親に会える事はないんだと、日に日に辛くなっていた。」

でも、ここから出ると、外にはいつもの俺の世界がある。その世界ではなくしたくなかった。そこは唯一、俺の存在を認めてくれる世界だったから。

だから、ここにある俺の辛い心から出た嫌な気持ちから、外の世界を壊してしまうことのないように、なにか心の支えが欲しかったのだ。

そして、あの日を境にようやく俺は日常を取り戻せていくことができるってきた。

一つのことを目指し、集中する事で、忘れることは出来なくとも、考えないようにすることはできるようになってきたのだ。

「それも、リサのおかげ、というわけだな」

あの日見つけたキャンパスを眺める。

このキャンパスに描かれた女の子を見つけて以来、俺はいつかこんな美しい絵を描いてみたいという一心で、それまで少し興味のあった絵の世界に足を踏み入れ始めたのだ。

描き始めると、思った以上に絵を描く事は面白かった。

何とかという小さなコンクールに度々入賞したりとか、美術の先生に誉められたりとかして、今はわりと順調だった。

でも、まだまだリサのような絵は描けない。けれど、いつかきつと描ける日がくるかもしれない。

だから俺は、描きつづけていられる。

夢を見て、目標に向かって。

「俺、頑張るからな。見ていてくれ」
リサに呟くように。

絵の中のリサはいつもと同じ表情。

俺はずっと同じ綺麗なリサの瞳を眺めていた。
そうしていると、

『うん、がんばってね。大樹ならできるよ』

そんな、リサの声が聞こえてくる。

なんだか心が温かく、じんわりしてくる。

この子を抱きしめたい……。

ぎゅっと抱いて……リサのぬくもりを感じたい……。

そうすると俺は、この嫌な一人きりな現実を、一瞬だけ忘れることができる……。

「リサ……。ありがとう」

リサをずっと見つめて。

時を忘れたように、見つづけていた。

「……」

ふと我に返る。

あたりは薄暗い、静かな部屋。

「ふう……。また、明日」

我に返って、絵をしまおうと、もう一度、リサを見る。

ふと、思った。

もし、この女の子が実際にいたとしたら……。

絵なんだ。実際のモデルがいるかもしれない。現実にはリサをみて、作者はこの絵を描いたのかも知れない。

この絵が描かれたのは何年も昔だと思うけど、リサのモデルの人はまだどこかにいるのかもしれない。

「……」

違う。

本当は、俺、リサが実際にいて欲しいと願っているんだ。

俺はリサのような絵を描きたいんじゃない、リサのような人が実際に現れてくれることを願っているんだ。

この絵という接点から、いつかリサのモデルの人との接点に繋がると思って、絵を描き始めたんだと、思う。

もし、実際にリサが俺の目の前に現れたら、俺は……。

いや、そんなことあるはずないよな。

こんな綺麗な緑色の虹彩を持つ人なんて、いるはずがないのだから

ら。

俺はそつとりサをしまい、自分の現実にも目を向けた。

淡い白い靄の世界。

目を凝らしても、遠くが見えない。

ただ明るい白い闇。

ここはどこだろう。

白い靄の中で俺は一人きり。

なんだか、寂しいな。

他の人は……いないのだろうか。

「くすん……。くすん……」

どこかで、子供が泣いている声がする。

「くすん……。くすん……」

どこだろう。あたりは何も見えない。

「なんだおまえ、へんなめをしちゃってさ」

「くすん、くすん……」

「なければなんとかなるとおもっているのか」

泣き声とともに小さな男の子の声が複数する。

どこだ……。何処にいるんだ？

「やめろよ。おまえ」

目を凝らしてみたら、目の前に、数人の子供がいた。

小さな女の子が屈んで真ん中にしゃがみこんでいる。

それを取りまくように数人の男の子がいた。

そこに、ひとりの囲んでいる男の子たちと同年齢の男の子が出てきた。

「なんだよ。おまえは」

「なんにんでもひとりのおんなのこをいじめるなんて、かっこわるいぞ」

「なんだよ、おまえはこいつのなかまか」

「ちがうさ。でも、いまからなかまだ」

「こいつ」

「いいのかよ。おまえたちがやっていたことをせんせいにいいつけ
てやるぞ」

「せんせいにいわないとなんにもできないのかよ」

「いわれておこられるようなことをしているのかよ。せんせいに
われたらおかあさんにもいわれておこられるぞ」

「おい……」

「ふん。おぼえているよ」

「ばーか」

女の子を囲んでいた男の子達が、持っていた棒を男の子になげつ
け、逃げていく。

「ばかはおまえらだろー」

男の子は逃げていく男の子達に言葉を返して、かがんでいた女の
子に近づく。

「くすん、くすん……」

「だいじょうぶか？ けがはないか？」

「くすん……」

「すこしふくがよこれちゃってる……。ねえ、だいじょうぶ？」

「くすん……」

男の子はそのまま泣いている女の子を見ていた。

「もう、だいじょうぶだ。おれはあいつらのようなことはしないか
らな」

「ほんと……」

女の子が男の子の方を向く。

「ああ」

「ありがとう……」

男の子に向けた女の子の瞳は綺麗な緑色をしていた。

「あ」

「えっ……」

「おまえのめ、みどりいろなんだな」

「うん……」

「こんなきれいなめをみたの、おれ、はじめてだよ」

「えっ……？」

「すごいな。なあ、おれとともだちになってよ」

「えっ……ともだち……？」

「ああ。そんなめのひとと、ともだちだなんて、かつこいい」

「ほんと……」

「ああ。おれはおまえがおんなのこだからって、さべつしたりしないぞ」

「ほんとうに……」

「ああ。たてる？」

「うん……」

男の子の差し出した手を取りながら、女の子は立ち上がる。

「えっと、なまえをおしえてくれるかな。おれのなまえは……」

でも、緑色の瞳の女の子って……？

この子はもしかして……。

一瞬何か思い当たるようなことを思い出しかけた。

ふと、俺はそこで、目を覚ました。

そのとき、その思い当たるような気持ちを忘れてしまった。

なんだっ たんだろう。今の夢は……。

出会い

胡太郎の言っていた転校生はいきなり今日やって来た。

「えー、皆ももう知っているように、今日からこのクラスに転入になる生徒だ」

先生の隣に、俯いて所在なげな女の子が立っていた。

大きめの黒ぶち眼鏡をかけた、肩くらいの黒髪の女の子。

俯いているからか？クラスの女子達よりもやや小柄に見える。

おとなしく、地味な感じを受けた女の子だった。

「『霧沢美裕』です」
きりさわみひろ

声も容姿に似つかわしく儂げだ。声は小さくて、かすかに一番後ろの席にいる俺のところにも聞こえるくらいだった。

「えー、こんな時期だけど、皆、仲良くやるように」

女の子ということで期待していた男どもがいたようだが、そいつらを見てみると、当てが外れた、みたいな表情をしていた。興味がなくしたようだ。

俺から見ると、そんなに悪くはないと思うけどな。

「一番後ろの窓際の席が君の席だ」

「はい」

一番後ろの窓際？って、俺の左隣じゃないか。空席だったけど、なんてお決まりな設定なんだ。

あ、そうか。やっとわかった。きっと胡太郎のことだ。ここまで知っていたのかもしれない。だからあえて俺にあんな話をしたのだろう。

俺の席から右に桂馬に飛んだ位置にいる胡太郎を見てみると、俺に向かってぴつと親指を立て、真面目そうな顔をして俺に、『そうだ』と言うように頷いていた。

やっぱりか。

俺の隣では、俯いて肩を落としながらさっきの女の子が席につく。

この女の子の名前は確か、霧沢さんと言ったな。

席についた霧沢さんを見ると、霧沢さんのさらさらした黒髪が窓の光に溶けてきらきらと輝いていた。光に溶けてもその色は薄まる事がないほど漆黒だ。こういうのを緑の黒髪というのか？クラスの他の女子達は髪を染めていたりしている子が多いので、これほどの黒髪を見るのは新鮮だった。

リサの髪は、実際だとこんな感じなのかもしれない。霧沢さんの瞳は緑ではなく、髪と同じ漆黒だったけど。

ああ、でも、綺麗な髪だな……。

「あー、それでは授業を始める……」

先生の眠くなりそうな声を聴いて、我に返った。

霧沢さんの髪に、女の子に見惚れていたなんて……。胡太郎をばかに出来ないな。

俺は少しだけづつが悪いような気持ちになって、あたまをかきながら授業に集中しようと正面を向いた。

「あつ……」

ふと、俺の隣から、俺にかすかにとどくような声が聞こえてきた。女の子の声だ。

俺の隣の女の子は霧沢さんしかいない。

左を向き、霧沢さんの方を見ると、心配げに俺を見ていた。軽く握った左手を胸のあたりににおいて。

「どうしたの？」

彼女の表情を読み取った俺は、教壇にいる先生に聞こえないような小さな声で霧沢さんに言ってみた。

「あの……」

霧沢さんが俺の足元に視線を落とす。

俺もつられて見ると、俺の足元に、消しゴムが転がってきていた。

「ああ、これか」

ひょいと消しゴムを拾い、霧沢さんに手渡す。

「はい」

「あ、ありがとうございます……」

ほんのちよつとだけ、霧沢さんは笑顔を見せた。

「ああ、俺、『もりむらたいき森村大樹』。隣の席だから、よろしく。これも何かの縁だと思うし、困ったことがあったら何でも言ってくれ」

どうしてなのかわからない。でも、自然にそんな言葉がでていた。

「もりむら、たいき……？」

ふと、俺の顔を見てびっくりしたような顔になる。

「え？どうしたの？」

「あ、はい、なんでもありません。ありがとうございます」

「あ、うん……」

でもそれも一瞬だった。かすかにお辞儀をするような格好で、俺に笑顔を向けてくれた。気のせいだったか。

「……」

窓の光に煙る霧沢さんの笑顔に、俺はしばし惚けてしまった。霧沢さんは、こんないい笑顔も持っているんだな。

俺は自分でもよくわからないこの慣れない感情に、当惑していた。

「よ、大樹」

「……胡太郎、なんだよ」

授業が終り、休み時間が始まるや否や、胡太郎が俺の席に来て話し掛けてきた。

ニヤニヤしていて、さも何かたくらんでいるという表情だ。

胡太郎は一瞬霧沢さんを見て、俺を見る。

「どうだ、あの子」

「胡太郎、声が大きいぞ。彼女に聞こえるぞ」

俺も胡太郎につられて霧沢さんを見たが、俺たちの会話は聞こえていないようで、霧沢さんはずっと右手で頬杖をつきながら窓の外を見ていた。

「さっきまでちょっと調べただけだよ。あの子のことは、他の男達はあまり興味がなさそうだよ」

「さっきって、霧沢さんが来たのはついさっきじゃないか」

「ふふん。俺の情報網は早いのだよ、森村君」

「ああ、そうかい」

まあ、さっきの皆の表情を見ればそれくらいの事はわかる。

「皆は、突然の転校生ということに気にはなっているのだけどな。」

このクラスには桜井さんや佐山さんを始め、芸能人、モデルレベルのかわいい女の子が多いだろ？ だからあえて無理をして新しい所を攻めるよりも近いところをまず攻めておきたいというのがやつらの見解だ」

「そうなのか？」

「ああ。それに彼女のファーストインパクトがそれほどじゃなかったからってところもある。とりあえずは様子見ってところか。よかったな」

俺の肩を叩きながら喜んでいる。

「何がよかったんだよ」

「だから、あの子はお前」

「なんでそんな話になるんだよ」

「さっき、なんかいい雰囲気だったじゃないか」

「いい雰囲気？」

「ちゃんとチャンスを生かす術を心得ているじゃないか。そのチャンスを上手く生かしたから、彼女がお前に笑顔をむけたんじゃないのかよ」

……さっきの霧沢さんとの消しゴムのやり取りは胡太郎に見られていたんだ。まったく。胡太郎のやつそれをネタに俺をからかっているんだな。

「あんなこと、だれでもするだろ？」

「まあ、そうだけどな。転入早々不安な時に優しくされるっていうのがポイントなんだよ森村君。キミのそうしたささいな態度から彼

女の心のベクトルをキミ向けさせるといふ方法がね。いや、それにしても、今回ののは見事だった。さりげなくそのチャンスを生かし、あまつさえこれから話し掛けるきっかけを作った。こんなに抜かりないなんてさすがだな。お前がこんなに手の早いヤツだったとは知らなかったよ。いや、我が弟子ながらあっぱれ」

「……俺が話していたことまで、聞いていたのか？」

「もちろんだとも、親友」

あの位置から俺たちのあの声を聞き取るとは……。胡太郎って、なんてすごいやつだ。

「その調子で、彼女のハートをゲットだな」

俺に向かって親指を立てた右手を突き出した。

ああ、もうこうなっては胡太郎に何を言っても無駄だろう。

でも、まあ、霧沢さんの髪すごく綺麗だし。特に窓から漏れる光に溶けて輝く彼女の黒髪は絵になる。霧沢さんを描いてみたい……なんて思ってしまったことは確かだ。

「そうだな……。ハートはともかく、霧沢さんには興味があることは確かだけだな。正直な所」

ぼつりと、霧沢さんに聞こえないように胡太郎にそう言った。

「おおっ！大樹の口からそんな言葉が出てくるなんて……。本気だったんだなっ！ああっ、俺はうれしいぞっ！」

いきなりわめきだす胡太郎。

「なんだよ、それ」

「よかったよかった。うん。大樹も普通の男だったんだなってわかってさ」

「ばしばしと俺の肩を叩く。」

「いや、俺はそういう意味じゃなくてだな……」

「いや、それはそういう意味だよ森村君。いや、ほんとうによかった。これで小生は不詳の弟子にレッスンをする必要がなくなっただというわけだ。いや、めでたい。これで森村君は卒業だ。これからは今まで教えてきた小生の教育を糧にがんばるのだぞ」

「ちょ、胡太郎」

「それじゃ、またな、親友」

授業が始まるチャイムが鳴ると同時に、俺に手を振りながら胡太郎は自分の席へと戻っていく。

まったく、俺の話を聞こうともしない。

結局の所、俺が霧沢さんに興味を抱いても、決めるのは彼女なわけ、俺から何かできるということじゃないと思うのだが。

俺はただ、霧沢さんの髪をモデルとして、これからリサのような絵を描きたいと思ったただけなんだ。まあ、霧沢さんをモデルとして連れて来て描くというわけじゃなく、見たことを想像で描くつもりなんだけど。

でも、霧沢さんに対しては少しだけ妙な感覚が残っている。何か大事な事を忘れているような、やらなければならないことを忘れているような……。

なんだろう、この感覚は。霧沢さんに関係があることなのだろうか。

まあいいや、そんなに気にすることでもないだろう。

「……………」

霧沢さんの方を見ると、ずっと窓の外を見つめたままで、彼女の表情を伺う事はできなかった。

その日の昼休み。

胡太郎は俺に、霧沢さんとうまくやれよ、との捨て台詞を残してそそくさと昨日言っていた組の女の子と一緒にどこかに消えてしまった。

まあ、胡太郎はいつもの事だが、さて、俺はどうしよう。

隣を見ると俯いて所在なげな霧沢さんがさっきの授業で使った教科書やノート等をかばんにしまっている。

霧沢さんはこの学校に来るのは初めてだから、お昼をはじめ、色んなことをどうしたらよいのかわからないと思う。

誰か同じクラスの女子とかが誘ってくれればいいと思っていたのだが、どうやら教室に残っているのはカップルとか決まった友人さんなどのグループだけだ。既に弁当やら購買品やらおもしろいおもしろいのお昼食を取っている。皆霧沢さんには興味を示さず、誰も話し掛けようともしてない。ここまで露骨とはさすがに面食らう。

まったく……。薄情なやつらばかりだな。しかたがない。さっき困ったことは俺に言ってくれと言った手前、何にもしないと言っのもちよつとだけはばかりがある。

でも女の子と話すのはちよつと恥ずかしい気もある。

ま、いいか。人助けだと思えば。

少しだけ躊躇した後、俺は霧沢さんに話し掛けた。

「あの、霧沢さん」

「あ、はい。あ、森村君」

霧沢さんは俺の方を見る。視線が俺のとぶつかる。その眼鏡越しの瞳に俺はちよつとどきつとした。

「あ、あの、霧沢さんさ、お昼とかどうするの？」

「お昼？」

「ああ。霧沢さん、この学校初めてだろ？だからさ、色々教えてあげようと思って」

「えっ？」

「霧沢さん、お弁当とか持って来た？」

「ううん……、何も」

「それじゃ、何か買ったりしないといけないか」

「うん……」

俯いて寂しげだった。どうしようと思っていたのだろう。

「それじゃ、いっしょに行かない？学食とか購買とかを教えるよ」

「いいの？」

「俺のことか？見ての通り俺だけあぶれているから、気にしなくて

もいいよ。霧沢さんは転校初日なんだし、色々教えてあげるよ」

「なんだか胡太郎みたいなことを言っているな、俺。」

「そうね……。それじゃ、お願いしようかな……」

「ちよつとだけ俯いて考えた後、そう言った。」

「なんだか少し嬉しかった。」

「よし、それじゃ、手っ取り早いところで学食に行こう」

「はい」

最初ちよつとドキドキしたけど、女の子と話すことって、こんなに簡単なことだったんだな。色々考えて損をした気分だ。

学食に行くと、かなりの生徒でこった返していた。

「うわ、やっぱり遅かったからだめだったか」

「たくさんいるのね……」

空いている席を探そうと机を見渡したがさすがに全て埋まっているようだ。

「まいったな、学食は無理か」

「空いている席……ないみたい」

霧沢さんも辺りを見回して空いている机を探していたようだ。

「仕方がない。購買にしようか」

「そうですね……」

俺たちが学食をあきらめて購買に向かおうとしたそのとき。

「おつ。そこにおわすは我が親友ではありませんか」

この声は。

「胡太郎。こんなところにいたのか」

目の前の席に胡太郎が座っていた。

「おおつ。大樹君、抜かりなく彼女を誘っているじゃないか。うん。うん。さすがに俺が見込んだ男だ」

「なんだよそれ」

「森村君？」

「あ、ああ、こいつは吾妻胡太郎って言って、俺の友人なんだ。同

じクラスメイトだよ」

「クラスメイト？」

「ご紹介にあずかり光栄。私は吾妻胡太郎。この森村大樹君の友人をやらせていただいております。よろしく、霧沢さん」

「は、はい……」

胡太郎は立ち上がって大仰に恭しく霧沢さんに挨拶をする。霧沢さんはいきなりそんな行動に出る胡太郎に当惑しているようだ。この普通とはかなり違う胡太郎だ。無理もない。

「で、大樹は霧沢さんと学食に食べに来た、と言っわけだな」

「他にここに来る理由なんかないじゃないか」

「くつくつく。そう照れるなよ。それにしてもちようどよかったぞ。俺たちは今飯を食い終わった所なんだ。な」

「ええ……」

胡太郎が視線を向けた先の席にはさつき胡太郎と出て行った隣のクラスの女の子がいた。

胡太郎はいつものことだが、この女の子には迷惑じゃないのだろうか。その子は何事が起こったのかと不安げな表情をしている。

「というわけで、森村君達にこの席を譲ろうと思う」

「えっ？ いいのか、胡太郎」

「いいのですか？」

「もちろんだとも。もう飯は食い終わったし、俺たちはこれから用事があるのでなす。そうと決まれば、善は急げだ。というわけですまないな、俺の親友なんだ」

「もう、仕方が無いわね」

胡太郎と同席していた女の子も胡太郎の事をよく知っているようだった。胡太郎の行動から話をあわせていた。少し安心する。

「それじゃ、森村君。上手くやるんだぞ」

「何を上手くやるんだよ。でも、サンキューな、胡太郎」

「ありがとうございます」

「ああ、いいって。それじゃ、ごゆっくり」

胡太郎はいつしよにいた女の子とともに学食を出て行った。

俺たちは胡太郎に感謝しつつ、席についた。

「よし、それじゃ俺が何か買ってくるよ。霧沢さんはどういものが食べたい？」

「うん。わたしは何があるかよくわからないから、森村君に任せる」

「苦手なものとかない？」

「うーん、大丈夫」

ちよつと人差し指を唇に当てて考える仕草をした後、そう言った。

「よし、それじゃ、他の人に座られないようにここで待っていてね」

「あ、うん。森村君、ありがと」

「いやいや」

なんだかコロコロと表情が変化して、最初に見たような暗くておとなしいイメージの霧沢さんとは違い、明るい印象を受けた。

もしかしたら霧沢さんは、元々はこういう明るい性格の女の子なのかかもしれない。最初から霧沢さんがこうだったらきっと他の男子生徒がほうっておくはずがないだろうに。そのくらい霧沢さんがかわいく見えた。そんな霧沢さんと俺がいつしよにいられるなんて、なんだか嬉しいような恥ずかしいような不思議な気分だ。

とりあえず、俺は日替わりランチを持って来た。

一人で生活している俺は弁当を作って持つてくるなんて事はないし、購買は面倒なのでほとんど毎日ここを利用している。おかげでこの全てのメニューを食べてしまったものだから、すっかり飽きてしまつて、こういう日替わりのような毎日違った献立のものを食べるようになっていた。

「お待たせ」

「あ、ありがとう、森村君」

「あそこの厨房の隣にある自販機で食券を買つて、厨房のおばちゃんに渡せば出してくれるから簡単だよ。こうして席を取るのが一番の問題だけど」

「ふーん……」

「いろいろメニューがあるけれどオススメはこの日替わりランチかな。こんなにあっても結構安いし」

「なるほどね」

今日の日替わりランチはチキンカツ定食。メインのチキンカツに味噌汁とお新香、ご飯とサラダがつく。これで350円なのだ。

「森村君はここを良く使うの？」

「ああ。ほとんど毎日かな」

「そうなんだ」

「弁当は作ってくれる人がいないから持って来られないし、購買って結構面倒なんだよな。並んでも食べたいのが売り切れにすぐなってしまうしさ。それに購買で買ったものを教室で食べるにしても、教室じゃあんな感じだから居心地が悪くて」

教室はカッパルばかりで、目のやりどころに困る。

「くすつ。本当にそうね。わたしもお昼のときどうしようかって思っちゃった。この学校ってみんなこんな感じなの？」

「そうなんだよ……。俺は結構さっきの胡太郎とよくお昼を食べるのだけど、あいつはあいつであんなふうにたいそうもてているみたいだから、よくこうして俺一人であぶれる事がある。一人身としてはつらいな」

「そうなの？森村君って優しいし、もてると思うんだけど。彼女とかいないの？」

「そ、そんなことはないよ。大体、こうして女の子と話すことだって稀な事だし。なんていうか、女の子と話そうとしても恥ずかしくてなかなか話し掛けられないんだし」

「本当に？わたしにはこうして話し掛けているのに？」

「えつ。あ、なんていうか、霧沢さんこの学校初めてだったし、霧沢さん一人でいたから、なんとかしてあげたいなって思ったからそんなことどうでもよくなっちゃって」

「くすつ」

「えつ？」

「あ、ごめんなさい。森村君、面白いひとなんだなって思ってた」

「そ、そうかな……」

「うん、そういう人、わたし好きだよ」

「そ、そう？ありがとう」

霧沢さんはにこにこしながら言う。どういう意図でそう言っているのだろう。変なことを想像して意識してしまうじゃないか。女の子ってみんなこんな感じなのだろうか。

ああ、もう、何を考えているんだ、俺は。

俺はとりあえず目の前のランチセットを片付ける事にした。

霧沢さんもランチセットに箸をのばしていた。

「うん、このランチセット美味しいね」

「気に入ってくれると進めた甲斐があって嬉しいよ。俺が作ったわけじゃないけど」

「くすす。もう、森村君、食べてる時に笑わせないで」

「そういえば霧沢さんってさ、本当は結構明るい人なんだね」

「えっ？明るい？」

「さっき初めて見たときはおとなしい女の子なのかな、なんて思ってたんだけど、こうして色々話をしてくれるから」

「うん、でもあの時はこの学校に初めてですこし緊張していたからかな」

「ああ、なるほど」

「それにね。わたし、昔からこうして転校する事が多くて、友達が出来てもすぐに別れてしまふから、最初から積極的にみんなと溶け込もう、なんて思わないようになったの。そのせいかもしれないね」

「それじゃ、また転校してしまうことってあるの？」

「ううん……。今度はずっとここにいると思うよ」

「本当に？」

「うん。わたしの実家がこの街にあるから。それにね、もうどこかに旅をするなんてことがなくなったから……」

霧沢さんは俯いて、何故か少しだけ寂しそうな瞳をした。何か辛いことがあったのかもしれない。

「霧沢さんの実家がこの街だったの？」

俺はさりげなく話題の方向を変えた。

「うん。小さい頃はこの街に住んでいたんだよ」

「そうか。俺もずっとこの街にいたから、もしかしたら小さい頃霧沢さんと会っていたかもしれないな」

「えっ？森村君、憶えてないの？」

「えっ？」

「わたし、森村君のこと知ってるよ。昔よく公園とかでわたしと遊んだじゃない」

「えっ？本当に？ほんとうに？」

「くすつ。やっぱり森村君面白い」

「ああ、もう、どっちなんだよ……」

「そうね、昔遊んだ仲だったらよかったかもね」

「そうだな。人の縁なんて遠いようで近いのかも。そんなことがあってもいいかな」

「うん。そういうのって、いいよね」

霧沢さんはコロコロと表情が変わって、ニコニコと話をしてくれる。とても話しやすく、楽しくて。お昼を食べ終わっても、霧沢さんと時間を忘れてずっと話をしていた。

それにしても、俺自身、こんなに自然に女の子と面と向かって話せるなんてどうしてしまったのだろう。

確かに恥ずかしいと思うのだけど、嫌じゃない恥ずかしさ。そのおかげで、いつもの自分を忘れずに、相手に作ることなく接することができている。今までの女の子に対する接し方と明らかに違う。

どうも複雑な気分だ。なんだか自分の知らないことを知って、自分に驚いているような気分だった。

でも、こんな気持ち、悪くはないかな。

放課後で

放課後。

「それじゃ霧沢さん、また明日」

「うん。また明日ね、森村君」

お昼が終わった後も霧沢さんとこの学校の事とか自分のこととか色んなことを話しているうちに、気がつくとな放課後になっていた。

俺はこれから部活、絵を描くということが待っているの、残りは明日ということにして霧沢さんと別れたというわけだ。

霧沢さんが教室を出て行くのを見ると、胡太郎が話し掛けてきた。「ふたりに仲良くまた明日、か。かー。一日であれほど仲良くなるなんてな。俺びつくりしたぞ」

「胡太郎、なんだよそれは」

「あの後なにがあつたのかな？森村君。彼女、最初の印象とずいぶん違うぞ。なにがあつたかこの吾妻胡太郎に洗いざらい話してみなさい」

「なにつてなんだよ。俺はただこの学校についての色んなことを霧沢さんに教えただけだって」

「かー、そんなとぼけちゃってさ。やり手だね森村君。もうすっかりいい関係になつているし少し妬けるぞ。霧沢さんと仲良くなつても俺を捨てないでくれナ、親友」

「ああ、わかつたわかつた」

まったく、どういう意味で胡太郎は言っているんだか。

「というわけで、俺も帰るな。今日は昨日すっぱかした分付き合わないといけないのです。大樹。また明日。部活頑張れよ」

「ん、ああ。また明日」

「じゃあな」

背中越しに手を振りつつ胡太郎も出て行く。

まったくしょうがないな、胡太郎は。いつもの事だけどさ。

さて、俺はこれから絵を描かないと。

今日は霧沢さんの髪を見て触発された。少し色んな色使いをしてみたい。あんな綺麗な髪の色を出してみたい。

「ん、ていうことは、人物画を描かないといけないうってわけか」

ふと思っただが、これはうかつだった。

そういえば俺は今まで静物画や風景画は描いた事があるが、人物画は描いたことがない。

描けない理由があつた。

モデルなってくれる人がいないのだ。

静物画はそこの物を置いて描けばいいし、風景画は外に出かけて景色を写生すればいい。

だから今まで、リサのような絵を描きたいと思っていても描けなかったのだ。

無論、鏡を見ながら自分を描くなんてまっぴらだった。

「まいったな……どうするか」

とりあえず描きかけの絵はないし、描きたい、と思う絵でなければ描きたくないし、描けない。

「うーん、明日霧沢さんに頼んでみようか……」

でも、今日初めて会った女の子に、あなたの髪がとても素敵だからモデルになつてくれ、なんて恥ずかしくて口が裂けても言えそうにない。

「仕方がない……。やはり想像して描くしかないか」

そんな絵の描き方もある。難しいが無理な事じゃない。

そう思つて絵を描く為に部室へと向かった。

部室には誰もいない。

この美術部には本当かどうか知らないが、俺以外にも何人か部員がいるらしい。でも俺はその人たちと入部以来出会った事がない。おかげでいつもこの備品を使い、好きな時好きなだけ静かに一人で絵を描いていられる。それはそれで嬉しいが、見てくれるのがたまに来る顧問の先生だけというのも少しだけ寂しい。

とりあえず、いつも使っているスケッチブックに浮かんだ絵のタッチを描いてみる。

「髪はこんな感じで……。えっと」

ふと自分の描いた絵を見たら、リサの絵の構図に似ていた。

というか、あの絵のままの構図だ。女の子が中央にいて、横を向いていて、その髪が風に流れていて……。

女の子、霧沢さんだけど、その子自身もリサに似ていた。

「って、なんで俺はリサを描いているんだ。こういう絵を描きたいわけで、この絵を描きたいってわけじゃないのに」

我に返り、コンテでスケッチした絵を少し離して見てみる。見れば見るほどリサの絵だ。

「でも、そういえば今日俺、リサを見ていないな……」

それどころか、リサのことを今まで忘れていた。毎日、ほとんどかたときも見忘れた事がないリサの絵を今日はまだ見ていない。

それは確か霧沢さんが来た時からだった。

「おかしいな……。俺がリサのことを忘れるなんて」

たぶん、霧沢さんと話をしていて、時間が経つ事も忘れていたほどだったからだろう。

絵を描くのを止めて、上着のポケットからリサの絵を取り出す。

リサはいつもの表情だった。

「まったく。俺は何をやっているのだろう」

しばらくリサの絵を眺めていた。

すると一瞬、そのリサの表情が、霧沢さんの表情とかぶった。

「えっ……」

何度か瞬きをしてもう一度リサを見してみる。

でも、見れば見るほどリサが霧沢さんに見えてきてしまう。

霧沢さんの瞳が緑色に見えるくらいに。

目を擦る。

「どうしたんだろう、俺……」

霧沢さんの髪がリサのイメージだって思っても、リサはリサだし、

霧沢さんは霧沢さんのはず。

リサが霧沢さんに似ているってことなのだろうか……。

霧沢さんを初めて見て、何か大事な事を忘れているって思ったのも、リサに似ていたからなのだろうか……。

いや、そんなことはないはずだ。女の子だからってことで、俺はみんな同じように見えているだけなのだろう。

それにしても、なんだか色んなことを話した霧沢さんの笑顔が頭から離れない。長く女の子と話したことで俺は少し舞い上がっているのかもしれない。

「今日はどうもダメだな……。やめやめ。明日にしよう」

どのみち人物画は描けないし、他の絵を描きたいという気にもならない。

俺は道具をしまい、部室を後にした。

昇降口で靴を履き替えているとき、ふと隣に生徒が来たのを感じた。

「あれ？森村君？」

「えっ？霧沢さん？」

隣の人影を見てみると、その人影は霧沢さんだった。

「よかった。やっぱり森村君だった」

「霧沢さん、どうしてこんな所にいるの？」

「わたしは今日からこの学校の生徒になったからだよ」

「いや、そうじゃなくて……」

「くすっ。ごめんね。森村君面白いから冗談を言ったんだよ。わたしはね、今まで職員室でいろんな手続きとかしていたんだ。書類にはんこを押すとかいろいろ。それでね、それがやっと終わってこれから帰ろうとしたところなの」

「そうなんだ」

「森村君は部活終わったの？」

「ああ。今日はどうもダメだから明日にしようと思って」
「だめ？どうしたの？」

「あ、えつと、俺は美術部で絵を描いているんだけど、今日はどうもいい絵が描けないから止めたんだ。明日また頑張るつもりで」

「ふーん、そうなんだ」

「ねえ、霧沢さん、一緒に帰らない？」

「うん、いいよ」

霧沢さんは笑顔で即答してきた。

「えっ？いいの」

「うん。わたしの家の方角ならいいよ」

いっしょに帰ろうと言ったのは、成り行きから出たもので、半分冗談みたいなものだったのに。霧沢さんならそう答えるとも思っけど、即答するなんて少し驚いた。

「霧沢さんの家はどっちの方向にあるの？」

「わたしの家は野高場のほうだよ」

「えっ？それじゃ、俺の家のほうじゃん」

「そうなの？」

「ああ。俺も野高場」

「くすつ。それじゃ、かえろ」

「あ、うん」

まさか俺の家の方向だったとは……。

さらにひと周りほどよけいに驚いた。

俺たちはそのまま、並んで校門を出た。

校門から出てしばらくしたとき、霧沢さんが楽しそうな口調で話し掛けてきた。

「ねえ、森村君って、美術部だったんだ」

「うん、そうなんだよ。部室で絵を描いてる」

「絵、描くの面白い？」

「本格的に描き始めたのは1年くらい前からんだけど、結構面白

いよ。俺にはどうやらすじがあるみたいでさ。顧問の先生もよく誉めてくれる。それに、なんとかっていう小さなコンクールにも入選したりしたし」

「コンクール？そんなに絵が上手いんだ」

「あ、いや、そんなほどじゃないよ」

「それでもコンクールに入賞するくらいなもの、上手いと思うよ。今度森村君の描いた絵見たいな」

「えっ？見たいの？」

「うん。わたしも絵には少し興味があるし」

「そうなんだ。だったら明日見てみる？」

「いいの？」

「うん、やっぱり色々な人に見てもらって感想とか欲しいし。それに、霧沢さんに見てもらうとなるとそれなりにはりきれるし」

「くすつ。森村君笑わせないで」

「いや、本気だつて」

「うん。それじゃ明日楽しみにしてるね」

住宅街をそんなことを話していたら、自分の家の近所まで来ていた。ドキドキしていたし、霧沢さんに相槌を打っていたから時間が経つ事を忘れていた。

それにしても、ずっと俺の隣を歩いている霧沢さん。俺の町内だというが、ここまでいっしょに着いてきていいのだろうか。

「つと、霧沢さん、家どこなの？」

「えっ？野高場だよ」

「それはさっき聞いたよ……」

「くすつ。冗談だつてば。あ。この道をもうちよつと行つた先」

「そうなの？俺の家もこの道の先だよ」

「そうなんだ」

「それにしてもこの『野高場』って、漢字を見たらなかなか最初は読めないよね」

「うん。わたしも初めて知ったとき、『のこうば』って読んじゃつ

た」

「そうそう、『のこうば』とか『やこうじょう』なんても読んじやうよね。胡太郎なんてもう半ばヤケになって『のこうば』って読んでいるよ」

「胡太郎君？」

「ああ、さつき学食で席を譲ってくれた俺の友達だよ」

「ふーん」

「つと、あ、ほら。あの三軒先に見える右側の青い屋根が俺の家だよ」

「青い屋根……」

「うん」

「わたしの家はあの信号のある道路をはさんで、その向かいの二軒先の赤い屋根の家だよ。見える？」

霧沢さんが指を指した方向には確かに赤い屋根の家が見える。

「えっ？ そうなの？」

「うん。そうだよ」

「ご近所さんだったんだ……」

「くすつ。わたしもびつくりした」

「そう言われると、近所に霧沢さんって名前の家があったな。そこが霧沢さんの実家だったんだね」

「うん。でも、もしかしたら本当に、森村君とは昔遊んだのかもしれないね」

「うーん、そうかも……。でも、子供の頃ってほとんど忘れてしまっているしなあ……」

「うん、そうだよね……」

ふと、霧沢さんは遠くを見て、寂しそうな声をだした。

余計な事だったかな……

気がついたら俺の家の前まで来ていた。

「それじゃ、俺はこれで」

「あ、森村君、また明日ね」

「うん。それじゃ、霧沢さん、また明日」

「あ、そうだ。森村君」

「えっ？なに？」

「森村君はいつも何時ごろ学校に行くの？」

「朝は普通かな。8時半にホームルームだから、大体8時ごろ家を出るよ」

「ねえ、明日わたしと朝いつしよに行かない？迎えに行くから」

「えっ？いつしよに？」

「えっと……。近所だから面白そうだなって思っ」

「いいの？」

「森村君にはまだ色々聞きたいこともあるし」

「それだったら大歓迎だよ。俺、結構寝坊する事もあるから、霧沢さんが来てくれるとなると、うかうか寝坊もしてられないだろうし」

「くすす。うん。それじゃ、明日ね」

「うん。霧沢さん。また明日」

まあ、霧沢さんが言う冗談にしても、迎えに来てくれるなんて嬉しい。

でも、女の子から迎えに来るね、なんて言われると酷く照れてしまっ、最後まで霧沢さんの顔を見ていらなかった。

それにしても、本当に明日霧沢さんは迎えに来るのかな。

霧沢さんにとっては俺の家は通学路の途中にあるとはいえ……。

うーん。

成り行きとはいえ、大歓迎だよ、なんて軽はずみに言ってしまったことを少しだけ後悔した。

家に帰った後、いつもと同じように一通り家事をし、俺はベッドに寝そべり、今日のこと、霧沢さんのことを反芻していた。

それにしても、俺がこんなふうに女の子と話すことができるなんて、自分のことながら酷く驚いた。

昨日胡太郎がおかしなことを言った所為で、俺は少し何か意識していたのだろうか。

それにしたって、今までの俺にしてみればすごい事だ。

俺は今まで、女の子と話すとき、いつも変なことを考えてしまう。女の子と話をしているとき、この子は俺のことをどう思うだろうとか、こんな事を言って嫌われたりしないだろうかとか、ネガティブな方向しか思いつかない。

いや、それだけじゃない。

話をしている時に、この女の子と仲良くしたいな、っていう気持ちが出てくるのだ。

仲良くして、あわよくばこの子と……なんて口にも出せないほどの恥ずかしい事を考えてしまう。いつもリサを見て思うような恥ずかしい事を。

だから、話している相手の女の子に対して心象をよくしたいなっと思うのだ。

そうすると、そんな恥ずかしい事を思っているって相手に伝わってしまうかも知れない。そう思われたらその女の子に俺は軽蔑されるかもしれない。

なんて循環を思ってしまうから俺は女の子と話すことが苦手になっってしまった。

でも、霧沢さんには、この、あわよくば……っっていう気持ちが出てこなかった。この子と仲良くしたいな、っっていう気持ちはあっても、その先には行かない。

ちよつと違うか。

霧沢さんは、俺の言ったことや俺の行動を面白いつて言ってくれたんだ。

それが長じて、たとえ、俺のあわよくばという考えを知られても、霧沢さんは気にしないような感じだったんだ。知られても、それは

俺の冗談だつて笑ってくれるような気がした。

だから、俺は、気兼ねなく話せたんだ。俺の話し方がこれでいいって思えたんだ。

胡太郎と話しているような感じまで受けたくらいだ

俺が胡太郎と話するときのように、何かを隠そうとか、特に心象を良くしたいとか、そう言った窮屈な考えが浮かばなかったんだ。

霧沢さんとあんなふうに自然に話せるくらいなら、俺の絵のモデルにもなってくれと言えるかもしれない。そう言っても、いっしょに帰ろうって言ったときのように、いいよって即答してくれるかもしれない。

明日それとなく話してみようかな。

霧沢さん、か。

なんだか、彼女、すごく……。

すごく……なんだろう。

まあいいや。

そういえば霧沢さんは近所さんだったんだよね……。

子供の頃にこの街にいたってことは、学区内からして俺と同じ学校に通っていたと思うけど。

俺はその頃胡太郎とだけいっしょに遊んでいたっていう記憶しかない。

そうだ、明日胡太郎にも聞いてみよう。

胡太郎のことだ。女の子のことなら憶えているに違いない。

「ふわぁ……」

ベッドで物思いにふけっていたらなんだか眠くなってきた。

今日はもう寝ようかな。

今日は絵も描けなかったから明日は今日の分まで頑張らないといけないし。

それに明日霧沢さんが迎えに来てくれるって言っていたから、寝坊なんかしたら恥ずかしいし。

「あ。そういえば、どうしてリサが霧沢さんに見えたのだろう」

俺は思い出したようにキャンパスを手にとってリサの絵を見てみた。やっぱり小さな写真なんかよりも本物の方がずっといい。

「リサは……リサだよな」

確かに、かわいいというところは似ているかもしれない。

黒髪はもとより、この優しい表情とか……。

って、俺、すごい事を思っているな。

霧沢さんがリサに似ているってことは、俺は霧沢さんにリサに思っていることをしたいって思っているってことになる。

なんだか恥ずかしくなってきた。

「……あのさ、リサ。君のモデルって誰だったんだ？」

えっ？ちよつとまでよ。

モデル？

もしかして、この絵のモデルが霧沢さんなんじゃ……。

「……。いや、まさか。そんなことあるはずもない」

この絵は少なくとも数年は昔に描かれたものだ。

俺と同じ年齢の霧沢さんがその頃にこのリサの年齢のはずもない。ちよつとだけ霧沢さんと雰囲気似ているだけなんだ。

ああ、もう寝よう。

これ以上余計なことを考えると、変なことを霧沢さんに求めてしまいそうだ。

蒲団に包まる。時間はもう日付が変わっていた。

朝

世界が淡い白色とした霞みのようなものに覆われている。

ここは、どこだろう。

なんだか昨日みた夢に似ている。

ああ、そうか。

これは俺の见ている夢の中だ。

夢か。そうか。

夢ならいいんだ。

あ。あそこに誰かいる。

二人いる。

小さな女の子と中年の男性のようだ。

男性の方はイーゼルを前にたて、パレットのようなものを持っている。右手には筆も持って。

どうやら絵を描いているようだ。

女の子はその男性の横に立って笑顔を見せている。

この女の子は……。昨日みた夢に出てきた女の子だ。

緑色の綺麗な瞳を男性に向けている。

「おとうさん」

「ん？どうしたんだ？」

そうか。この人はこの女の子の父親なんだ。

「あのこうえんであったおとこのこ、わたしのね、このめがすきだっていつてくれたんだよ」

「へえ。それはよかったな」

「おとうさんといっしょだね」

「ああ、そうだな」

「わたし、このまちにすみたい」

「そうか。そうだな……。ここはおまえのお母さんの生まれ育った街だしな。しばらくはこの街にしよう」

「ほんと？」

「ああ。この街にはおまえのことが好きな人もいるみたいだしな」

「うん。わたしのこのめがきつていつてくれたんだよ。そんなひと、はじめて」

「その男の子のこと、好きか？」

「うん、すき。だってよくあそんでくれるんだよ。わたしのともだちなんだ」

「そうか。それはよかったな。それじゃ、お父さんも頑張ってこの絵を仕上げるか」

「うん」

「今度はお前を描いてあげるからな」

「ほんと？」

「ああ。その綺麗な瞳をこの絵に写してな」

「ほんと？」

「ああ。お父さん、頑張ってお前をすごく綺麗に描いてあげるからな」

「ありがとう、おとうさん」

「ああ」

父親はそつと女の子の頭を撫でている。

仲がよさそうな親子。

その女の子の瞳は、緑色で。

あのリサの瞳と同じ、緑色で。

そうか。

きっと、この人がこの子を描いた絵が、リサの絵なのかもしれないな。

ああ、そうだよ。この子が、リサのモデルなんだ。

この子が……。

『森村君』

あれ……。俺を呼んでいるのか……？
ピンポン。

なんだか遠くで聞きなれた音がする。

「ん……」

『森村君』

霧沢さん……？

ピンポーン……。

これは……家のチャイムの音だ。

「あっ！」

そういえば、今日、霧沢さんが迎えに来てくれるんだった。

「しまった……。寝坊した！」

俺は慌てて飛び起きて、自分の部屋から飛び出し、玄関の扉の向こうにいるであろう霧沢さんに駆け寄る。

まだいてくれよ……。

「霧沢さんごめん、寝坊した。これから着替えたりするから先に行つていいよ」

「森村君？」

玄関の扉を少し開けて霧沢さんを見た。

よかった。まだいてくれたみたいだ。

霧沢さんは昨日教壇に立っていたように、俯いて所在げな佇まいをしていた。しかし俺をみて、ふわつと笑顔になった。

「いや、ごめんってば」

「よかった。まだいてくれたんだ」

「はい？」

「ごめんね。わたしも寝坊しちゃったの」

「ええっ？」

霧沢さんはそう他人事のように言った。

玄関にある時計を見ると、8時15分。

ここから学校まで走っても15分はかかるから、8時半にあるホールームには……。

「き、霧沢さん、先に行つて！」

「でも……」

「俺はいいから、遅刻しちゃうよ！」

「うん……。森村君も早くね」

「ああ、すぐに俺も行くから！」

「うん」

遅刻しそうだって言うのに俺の家に迎えに来るなんて……。

俺はすばやく身支度をして、家の戸締りをして、家を出た。

この間、5分とかかってはいないはずだ。

「よし、ギリギリ間に合うかもしれない！」

玄関を飛び出そうとした時。

「あ、森村君。早かったね」

霧沢さんが家の門の前に寄りかかるように佇んでいた。

俺は玄関の階段を踏み外しそうになってしまった。

「つて霧沢さん！なんでこんなところにいるの？！」

「あのね、森村君」

「う、うん」

「実はわたし、学校へ行く道をよく憶えていないんだ」

「えっ？」

「昨日来た時は近所の知り合いの人に車で送ってもらったし、帰りは森村君と話しながら帰ったからよく憶えていなくて」

「……」

「わたし、歩いて学校に行ったことが1回しかないから、ちゃんと行けるかどうか心配だったから……。今日森村君と行ければちゃんといけるから憶えるかなって思ってた。森村君が近所だったし……」

「……」

「あ、そうだ。森村君」

「な、なに……」

「おはよう」

「……ああ、おはよう、霧沢さん」

霧沢さんは笑顔でのほほんとそう言った。俺が今急いでいた空気とは明らかに違う、のどかな空気が流れていた。

左手の時計を見る。時間は既に8時25分。
もう遅刻は免れない。

「霧沢さん」

「なに？」

「もう……。転校してきた次の日早々に遅刻だよ」

「あ。そうだね」

霧沢さんも腕時計を見て、さも他人事のようにそう言った。

「はあ……。それじゃ、学校に行こうか。ホームルームは遅刻……いや、もうついた頃には終わっているだろうから、1時間目の授業に間に合うように」

「うん。ありがと、森村君」

俺たちは小走りに学校へと向かった。

学校に着くと上手い具合にホームルームが終り、皆次の授業の準備をしている喧騒の中だった。

とりあえず授業には間に合ったらしい。

「いいタイミングだったね」

「うーん、間に合ったと言っていいやらなんとやら……」

「くすつ。わたしは結構面白かったよ」

「そうだね。ある意味俺も面白かった。でも、もうこんなのは勘弁だからな、霧沢さん」

「ごめんね、森村君。でもありがとう」

「まあ、寝坊した俺も言えた義理じゃないけど」

「くすつ。それじゃ、森村君、また後でね」

「ああ……」

俺も霧沢さんに習って席につく。

こんな形で女の子の子といつしよに登校するとは思わなかった。貴重な経験かもしれない。

「あーあ。朝飯食べそこなっただか……」

「大樹。うつす」

胡太郎がニヤニヤしながら俺の席に来る。

「ああ、胡太郎、おはよう」

「ふふーん、森村君」

「な、なんだよ」

「二人してこんな時間に来るとはねえ。何かあったのかな？」

「ああ、ただの寝坊だよ。俺たち」

「ええっ！」

「なんで驚くんだよ」

「そつか。そうか。そういうことなんだな」

うんうんと楽しそうに頷く。

「胡太郎、なんだよ。言っていることがよくわからないぞ」

「ああ、大丈夫だ。ただ俺はいつもの大樹だったのかなって思っただけなんだ。すまん、親友。俺はお前を見くびっていた。俺を許してくれ」

「はあ？ 胡太郎、一体何を言っているんだ？」

「いや、みなまで言うな。言いたい気持ちもわかるけどな。公衆の面前だ。そういう話題は控えようぜ親友。いや、それにしてもよかったよかった。おれが言った通りがんばったんだな。おめでとう」

「なにがめでたいんだよ」

「それじゃ、詳しい話はまたあとでな。親友」

そのまま言いたい事だけを言っただけで胡太郎は俺の前から離れていく。

「おい、胡太郎……」

「昨日の夕方二人で歩いていくのを見たっていう情報は本当だったのか……」

胡太郎はなにやらぶつくさ言いながら自分の席に戻っていった。

「どうしたの？」

俺たちの会話を聞いていたのか、隣に座っている霧沢さんが話し掛けてきた。

「さあ？でもあの通りよくわからないヤツだからな胡太郎は。霧沢さんも振り回されるかも。気をつけてね」

「くすつ。仲がいいのね」

「そう？」

「うん。そういうのうらやましいな。あ、先生が来たみたい」

「あ、ああ……」

まったく、胡太郎のやつ。一体何を言いたかったんだろ。

後で聞きたいこともあるし、次の休み時間にでも聞いてみるか。

というわけで最初の授業が終わって早々、俺は胡太郎に話し掛けた。

「胡太郎、ちよつといいか？」

「ああ、どうしたんだ大樹。お前から話し掛けてくるなんて珍しいな。もうさっきのことか？まったく、しょうがないな」

「ん、ああ、それも気になるけど、それはあとでいいや。あのさ、俺たちの小さい頃、俺たちの他に遊んでいた女の子とかいなかったか？」

「ん？ 霧沢さんのことか？ よく遊んでたぞ」

「えっ？ 本当か？」

俺が訊く前に答えるなんて、本当に会ったことがあるのか？

「なんだ大樹、憶えていないのか？ あんなに仲良く遊んでいたのに。お前が霧沢さんと仲良くしているのはそうだったからじゃないのか？」

「そ、そうなのか？俺たち遊んでいたのか？」

それじゃ、あの話は本当のことだったのか……。

「あははは。そんなことあるはずないじゃないか大樹。霧沢さんは昨日転校してきたばかりじゃないか」

「えっ？」

「冗談だよ冗談。まったく、そんな話までしてくるなんて、のろけか？　このう。もう妬けるね、森村君」

ひじで俺の胸をこつく。

「いや、霧沢さんの家さ、俺の近所なんだよ」

「そうなのか？あの『のこうば』に」

「ああ。目と鼻の先。昨日知ってびっくりしたんだ」

「ああ、もう、だから森村君。そんな自慢話はいいて」

「自慢じゃないって」

「冗談だ。えっと、こういうことだろ？　昨日霧沢さんと一緒に帰ったら、家が近所だって事を知った。だから昔からの知り合いじゃないかって大樹は思った。そう訊ねたら霧沢さんはぐらかした」

「そうそう」

「でも、俺は大樹と会ってからずっと二人で遊んでいたぞ。3人なんて事はなかったぞ。霧沢さんちのこと知らない。俺は。これは冗談じゃなく本当だ。第一、俺も知っていたら霧沢さんとお前にそういう話をするさ。昔一緒に遊んだよな。とかさ」

「そうか……そうだな。だったらいいんだ。すまないな、変なことを聞いて」

「それよりも大樹君」

「彼女、具合はどうだった？」

「はあ？　具合ってなんだよ」

「もう、森村君はシャイなんだから」

「なんだよ、それは」

「まあ、いいか。そんなことを訊くのは野暮だしな。霧沢さんをずっと大事にしてやれよな」

「胡太郎」

「なんだよ？」

「一体何のことを言っているんだ？さっぱりわからない」

「えっ？　何を言っているんだ。お前が霧沢さんを抱いたってことだろ？」

「はあ？ 抱いた？」

抱いた？ 霧沢さんを？

それはつまり……。

想像したら急に顔が赤くなってきた。

「……胡太郎」

「ん？」

「なんでそうなる」

怒るよりもひどくあきれてしまった。そういえば胡太郎はそういうやつだった。

「だって、夕べ霧沢さんと頑張ったおかげで、仲良く遅刻してきたってことなんだろう？ いいじゃないか若いつてのは。俺も最初はそんなもんだったし」

「はあ……。そんなことあるはずないだろう」

「そうなのか？」

「今日は霧沢さんがこの学校への道がまだよくわからないからって言うことでいつしよに来たんだよ」

「またまたあ。俺はだまされんぞ」

「まったく。俺は仕方がないからいいとして、霧沢さんや周りの人にはそういう話はやめてくれよな」

「あはは。すまなかった。セクハラだったな」

「まあ、そういう所は胡太郎はしっかりしているからいいか……」

「で、どうだったんだよ、本当の所は」

「つて、霧沢さんとはなんにもないつて。なんで俺がすぐにそんなるんだよ」

「本当なのかよ」

「本当に決まっているじゃないか」

「なんだ……。そうなのか。つまらん」

「まったく、胡太郎は……」

「でもまあ、いずれそうなるだろうしナ。頑張りたまえ、親友」

「ああ……がんばるよ」

「うむうむ」

方向はともわれ、これは胡太郎なりの励まし方なんだ。悪意はないと思う。

それにしても霧沢さんを抱いただなんて。冗談にしても酷いぞ胡太郎。

でも、ほんのちょっとだけ、そうなりたいなと思う自分もいて、恥ずかしいようなばつが悪いような、そんな複雑な気持ちだった。

二人きりの部活

昼休みになった。

「森村君、今日は俺学食じゃないから、席は譲れないからナ」

「そうなのか。ああでも、昨日はありがとうな」

「いやいや、礼には及ばないって。それじゃ、俺は行くから。大樹は霧沢さんと仲良くナ」

「なんだよ、それ……」

「ははは。じゃあな」

こうして今日も胡太郎は休みになった早々に姿をくらまして、俺と霧沢さんだけになってしまった。

実は、さっき胡太郎が言っていたことが心に残って、恥ずかしくて、ちょっとだけ霧沢さんに話し掛けることを躊躇していた。

でも、このままずっと何にもしないでいるって言うのもなあ……。

「森村君、今日も学食？」

そんなふうにとっしようにかと思っていたら、霧沢さんから話し掛けてきた。

「あ、うん、そうだよ。霧沢さんもやっぱり学食？」

「うん」

霧沢さんの顔を見たら胡太郎が言っていたことなんてどうでもよくなってしまった。まったく。変なことを意識しなければこうして普通にできるのに。

「それじゃ、またいつしよに行こうか」

「うん」

というわけで今日も霧沢さんと学食に来た。

昨日よりも遅くなってしまったが、今日は昨日より人が少ないようだった。今日は天気も良いし暖かい。こういう日は外で弁当などを広げている連中が多いので学食に来る人が少ないのかもしれない。そうか。きっと胡太郎もその一人になったのだろう。

俺たちは難なく空いていた席に座った。

「今日は楽に座れたね」

「毎日こうだといいんだけど。今日はほんとついてるな」

「くすつ。今日は遅刻をしてもお咎めなしだったもんね」

「ほんと、良かったよ。霧沢さんのおかげかな」

「くすつ。もう森村君」

「あはは……」

本当に霧沢さんと話すのは楽しい。

そうだ、今ならあの事を訊いても承諾してくれるかもしれない。

「あのさ、霧沢さん、一つ頼みがあるんだけど」

昼食をほとんど食べ終わった後、躊躇いがちにそう切り出してみた。

「頼み？」

「俺、美術部にいるって昨日言ったよね」

「うん。わたしに絵を見せてくれるって」

「それでさ、これから次のコンクールに向けて絵を描こうと思っているのだけど、その絵の……モデルになってくれないかな？」

「絵のモデル？わたしが？」

「うん。人物画を描きたいんだ。霧沢さん頼まれてくれないかな」

「でも……」

「いや、えっと、別にヌードになつてくれとか、何時間もじっとしていてくれというわけじゃなくて。ただ、その……、霧沢さんのその髪がとても綺麗だったから、描くときの参考にしたいな、って思っ
つてさ」

少しドキドキしながらもそう言えた。

「わたしの髪？」

「あ、うん。霧沢さんの髪、すごく綺麗で、絵になるって思っ
描いてみたいって思った」

「綺麗……」

霧沢さんは照れるように自分の前髪をいじっていた。

「やっぱりダメかな……」

まあ、仕方がないか。

そう思ったとき、霧沢さんは笑顔になって。

「ねえ、こういうのはどう？」

「なに？」

「わたしも美術部に入って絵を描く」

「ええっ？」

「昨日ちよつと考えたんだけどね、それもいいなって思ったの。実はわたしのお父さん絵描きさんだったの。だからわたしも描いてみたいなって少し思ってたんだ」

「絵描きさん……」

「うん。ちよつとは名の知れた画家だったらいいんだよ」

なんだか朝、見た夢を思い出す。

まさかな……。

それよりも、今、霧沢さん、お父さんのことを『だった』と過去形で言っただような。

それに、少しだけ哀しそうな表情を見せた。

「へえ。お父さん画家なんだ。それじゃ、霧沢さんも上手いかも」

「えっ？そ、そんなことないと思うよ。お父さん、画家だったけどわたしも絵が上手ってことになるともいえないし……」

やっぱり聞き間違いじゃなかった。霧沢さん、今お父さんのことを『だった』と過去形で言っていた。

それじゃ、もしかして……。

「それじゃ、互いに描きながらってのはどう？」

「あ、うん。それならいいよ。わたし、絵を描いている人の前で何にもしないってことがちよつとだけ嫌だなって思ったんだ。一生懸命やっている人をみながらじつとしてるってことが」

「ああ、なるほど」

いや、やっぱりお父さん亡くなったの？　なんて聞けるはずもないよな。霧沢さんの冗談だったら、そんなことを言うのは失礼だし、

本当だったら、そんなことを思い出すことも嫌だろうからな。

俺の無粋な好奇心で霧沢さんを傷つけることもない。

「それなら大歓迎。それじゃさっそく今日から行って見る？」

俺は勤めて楽しそうな口調で言った。

「くすつ。うん」

「それじゃ、よろしく、霧沢さん」

「はい。よろしくね、森村君」

霧沢さんが俺の絵のモデルになってくれるだけじゃなく、霧沢さんといっしょに絵を描くことになるなんて。

これは思ってもみなかった幸運かもしれないな。

今まで以上に描くことが楽しみになるかもしれない。

よし、がんばろう。

というわけで放課後。

胡太郎に霧沢さんといっしょに部活に行くとか言ったらまた冷やかされるだろうかと気にしたが、胡太郎は胡太郎でどこかの女の子とさっさと帰ってしまったので少しだけ拍子抜けした。

それはともかく、俺は霧沢さんと美術部部室に来た。

当然ここには絵を描くための道具はなんでも揃っているのですぐに誰でも絵を描くことができる。

「さすがに何でもあるのね」

「ああ。水彩画から油絵まで何でも描けるよ」

霧沢さんは珍しそうに部室の物を眺めている。

「森村君は何を描いているの？」

「俺は静物画とか風景画かな。水彩画だよ。油絵もやってみたいけどね、難しくて」

「ふーん」

「えっと、これが前に描いた俺の絵」

俺は奥から前に描いた絵を見せた。コンクールには出さなかったものがいくらかある。

「わー。やっぱり上手い」

「そ、そう？」

「うん。なんとなく温かみがあるよ。森村君が優しい人なんだなっ
て感じられる」

「もう、霧沢さん……」

そんな笑顔で誉められると照れるって。

「くすつ。わたしもこんな絵描けるかな」

「もちろんだよ」

「うん、わたしもがんばる」

「あはは。俺も負けないから」

「くすつ。うん」

とりあえず絵を描く道具を揃えた。

「それじゃさ、霧沢さんは何を描く？ 静物画とかやってみる？」

「森村君」

俺のほうを見てにこつと笑う。

「えっ？ 俺？」

「くすつ。だってさつきそう言ったじゃない。お互いに描こつて」

「えっ？ 本気だったの？」

「だって、わたしだけ描かれるの恥ずかしいよ」

「それもそうだけど……。俺なんか描いて面白い？」

「うん。面白いよ」

「もう、霧沢さん……」

そんなふうには霧沢さんに言われるとは思わなかった。

「くすつ。それじゃ、このスケッチブックに描いていい？」

ふと俺が昨日描いていたスケッチブックを手に取る。

「あ、ちよつとまって。それは俺の描きかけだから……。えっと、
これを使つていいよ」

昨日霧沢さんを想像して描いたあの絵なんか見られたら恥ずかし

い。俺は近くにあった新品のスケッチブックを渡そうとした。

「あ、これ森村君のなんだ。ねえ。これも見せてくれる？」

「え、あの、ちょっと……」

霧沢さんはそのままぱらぱらと俺のスケッチブックをめくっていき。

「わあ。たくさん描いているんだね……」

「あ、あの、霧沢さん……」

そのままぱらぱら見ている霧沢さんを止める事が出来ずに、ただずっと見ていた。

「ふーん……。あ」

「えっ……」

最後のあたりで何かを見つけたような声を出して、そのまま見入っていた。

「霧沢さん？」

「やっぱり上手いんだなあ……。うん、ありがと。ラフやスケッチでもこんなに上手く描けるんだね。森村君、やっぱりすごい」

「あ、ありがと……」

スケッチブックを閉じ、俺に返してくれた。あの絵は見られていなかったのかな。それとも、見られてもいい絵だったことで片つけられたのだろうか……。まあ、もうどっちでもいいか。恥ずかしかったけど、今では見られてもいいやって気持ちになってる。

霧沢さんって不思議な人だ……。

「それじゃ、霧沢さんはこれを使って描いてみて」

「いいの？これ新品じゃないの？」

「備品だし、他に部員もいないし。いる部員は使えるだけ使っているってことになっているし。遠慮はないよ」

「そっか、森村君部長さんなんだもんね」

「部長？あ、そうか。そう言われるとこの部員は俺一人だからそうなるのかな……。気がつかなかった」

「くすっ。それじゃ、これを使わせてもらおうかな」

「ああ。描くものもコンテから色鉛筆まで何でもあるから、なんでも使っていていいよ」

「森村君は？」

「ああ、俺はスケッチブックにはコンテ。消しゴムを使わないように描く練習も兼ねてる」

「ふーん。それじゃわたしもそれにしてみるね」

「ああ。それじゃ、ちょっと描いてみようか」

「うん」

俺たちは向かい合って絵を描き始めた。

真面目な顔になって、俺とスケッチブックを交互に見ている霧沢さんを見ていると、なんだか緊張してきてしまう。

俺も霧沢さんを見ながらコンテを動かした。

俺は逆光から霧沢さんを眺める形だ。夕方になって窓から差し込んでくる夕日に溶ける霧沢さんの髪がすごくいい。俺が望んでいた光景だ。

コンテが進む。

「ねえ、森村君」

「えっ？ な、なに？」

静かな部屋に霧沢さんの声が流れる。俺は少しびくりして絵を描く手を止め、霧沢さんを見た。

「森村君って、いつもこんなに静かなここで一人で絵を描いていたの？」

「あ、ああ。たまに顧問の先生が見に来る事があるけど」

「そうなんだ……」

「まあ、静かだからはかどるけどね」

静かな部屋で霧沢さんと二人きり。なんだかそれを意識したら恥ずかしくなってきた。霧沢さんの顔を見られなくなってきた。

「寂しくない？」

「あ、いや、でも今は霧沢さんがいるから」

「くすっ。もう、森村君」

なんか照れるな……。

「でも正直少し寂しかったかな。せつかく描いても見せられるのは先生ぐらいだけだったし」

「ねえ森村君」

「なに？」

「どうして絵を描こうと思ったの？」

「うーん、なんていうか……。俺の好きな絵があつてさ。その絵を初めて見たとき、そのとき落ち込んでいた俺を励ましてくれて。そのおかげで今の自分がいてさ。俺もいつかこんな絵を描けたらいいなつて思つて始めたのがきっかけかな」

「そうなんだ……」

霧沢さんは納得したのか、そのまま次の言葉を出さなかった。

霧沢さん、何を考えているのかな……。

そうして、しばらく互いに無言で絵を描いた。

「うーん、こんな感じがなあ……」

霧沢さんが書いていた手を止め、スケッチブックを少し離して見ていた。

「霧沢さん、出来た？」

「あ、わたしはまだちよつと恥ずかしいよ。森村君は？」

「うん、俺はこんな感じ……」

俺も少し絵を離して遠くから見る。元々素描……デッサンなので早く描けている。

霧沢さんの黒髪の輝きがほんの少しだけ思つた通りにかけて、自分では少し良く出来たかなつて感じに仕上がった。

まあ、初めて人物画を描くのだからこんなものだろう。

「わあ。これがわたし？」

霧沢さんはいつのまにか俺の横に回つていて俺の描いた絵を見ていた。

「わっ！ 霧沢さん、見ないでよ！ 恥ずかしい」

「ねえ、そんなこと言わないで、もっと見せて」

「あつ……」

霧沢さんは俺がひっこめようとしたスケッチブックを手に取り、そのまま俺の隣で眺めた。

「わぁ。森村君、やっぱり絵、上手いんだね」

「そ、そうかな……」

霧沢さんが俺のすぐ横に、霧沢さんの吐息を感じるくらいに接近している。女の子の、霧沢さんのいい匂いがふわっと俺を包みこむような感じがした。

「でも、これがわたしなんだなって思うと、ちょっと複雑な気持ち俺の絵を見ながら霧沢さんは言った。隣にいる俺はドキドキしてしまつて、何を言ったらいいかわからなくなってくる。

「ね、ねえ、霧沢さんのも見せてよ」

「わ、わたしはまだ初心者だからだめー」

俺が霧沢さん持っていたスケッチブックを手に取りうとすると持っていた自分のスケッチブックを胸に隠すように抱いて、少し離れる。

「もう、俺だけ恥かしいじゃないか」

「でも、もうちょっと練習したら見せるから、ね」

「しょうがないな……。それじゃ楽しみに待つてるよ」

「くすつ。あんまり期待されると困るよ」

「でも、どう？俺の絵」

「うん。なんだか綺麗過ぎてわたしじゃないみたい」

「そう？」

「それとも、森村君にはわたしはこんな風に見えるのかな？」

「霧沢さん、もう。せっかくモデルになってくれた人を酷く描けるはずないじゃないか」

「くすつ。森村君照れてる？」

「そりゃそうだよ……。まったく」

「でも、ありがと、森村君」

「えっ？」

「わたしね、嬉しかったよ。わたしを描いてくれたことが。本当にわたし……」

「えっ……」

霧沢さんの最後の言葉が小さくてよく聴き取れなかった。

「くすっ……。ねえ、これ、スケッチブックってことは本番じゃないんだよね」

「あ、うん、そうだけど……」

「また、わたしを描いてくれるんだよね」

「霧沢さんさえ良ければ大歓迎」

「くすっ。ありがとう」

はぐらかされたけど、まあいいか。

それからもしばらく絵を描いていたら、夕日がだいぶ沈み、あたりが薄暗くなってきた。

「あ、もうだいぶ遅くなってきたな。今日はこのくらいで帰ろうか」

「あ、ほんとだ。もう外は真っ暗なんだね」

「霧沢さん。明日から本番に向けての絵を描きたいと思うけど、お願いしていいかな？」

「くすっ。いいよ。わたしも部員にしてくれたし」

「それじゃ、明日もよろしく。霧沢さん」

「はい。よろしくお願いします、部長」

「な、なんか部長って照れるな……」

「森村君照れてばかりだね」

「もう、霧沢さん……」

「くすっ……」

その日もまた、俺たちは一緒に帰った。

帰り道に絵を上手く描く方法とか、コツとかを色々話しながら。

霧沢さんは本当に楽しそうに相槌をうつってくれるし、そんな霧沢さんの仕草を見ていて、俺も楽しくなってしまう。

なんだか、こうして霧沢さんと出会えてよかったと、心から思えた。

涙

淡い白い靄の中。

ああ、また俺は夢を見ているんだな。

あ。またあの親子がいる……。

「ねえ、おとうさん」

「ん？どうした？」

「おとうさん、きょうもおでかけ？」

「ん？ああ。今日は公園の方に行くてくるからな。留守番お願いな」

「うん。わたし、るすばんする。それでね、おとうさん」

「なんだい？」

「あのね、わたし、おべんとつくつたの」

「えっ？お弁当？」

「おとうさん、おひるごはんないでしょ？」

「ああそうだけど……作れたのか？」

「うん。わたし、がんばったよ。まいにちがんばってれんしゅうしたの」

「そうか。そうか。ありがとうな」

「うん。それでね。わたしもいっしょにつくつたからおなじものだよ」

「そうか、そうか。ありがとうな」

父親はそつと娘の頭をなで、優しくそんな瞳を向けていた。

「ねえ、おとうさん」

「なんだい？」

「わたしのおかあさんってどんなひとだったの？」

「ん？お前に似てすごく綺麗な人だったよ。よくお前とあの公園に行っていて、すごく絵になった」

「ほんとうに？」

「ああ。そうだ、今描いているお前の絵、お母さんを入れてみよう

か」

「えっ？おかあさんを？」

「ああ。きつとお前が大きくなったらお前の母親とそっくりになるだろうからな……」

「わたしがおかあさんになるの？」

「はははは。そうだな。そうだ」

「でも、わたし、おかあさんじゃないよ」

「そうだな。お前はお母さんじゃない。でも」

「でも？」

「お母さんのように綺麗になれる」

「ほんと？」

「ああ。もちろんだ。だからお父さんは綺麗になったお前を描くつもりだ」

「ほんと？」

「ああ。お前がいい子に育ってくれるように、いい絵を描くからな」
「うん！それじゃ、わたしもがんばって、まいにちおとうさんのおべんとつくるね」

「そうか。それじゃ、お父さんも頑張るな」

「うん！」

仲がいい親子……。

俺も昔はこんな頃があつたのだろうか……。
いいな。こんな夢。

こんな夢を毎日見ることが出来たら……。

俺……。

次の日。

「森村くーん」

昨日と同じように霧沢さんが迎えに来た。

時間は8時ジャスト。霧沢さんもさすがに連続では遅刻はしなかったみたいだ。

かく言う俺も、今日はちゃんと起きられた。

さすがに霧沢さんが迎えに来てくれるって言うからには、そうそう遅刻もしてられない。

「うん。霧沢さんおはよう。よし、今日はばっちりだ」

「くすつ。うん。おはよう森村君」

「それじゃ、今日はゆっくりいきみますか」

「くすつ。うん」

春の朝日はなんとなく清々しい。最近こうして外の空気をのんびりとかみ締めるなんてこともなかったな……。

「今日もいい天気になりそうだな」

「うん。そうだね」

「雨が降って天気が悪いよりも、こんなふうに晴れていい天気の方がいいもんなあ……。まあ、ずっとだと困るけど」

「ねえ、森村君」

「ん？なに？」

左隣に歩いている俺より顔一つ分くらい背の低い霧沢さんを見る。かばんを両手で持って前に下げ、よくみる女の子の仕草をしている。

「えつと……」

俺を見て、霧沢さんは言葉を濁すように語尾を小さくした。

「どうしたの？」

「えつと、えつと……。でも、どうしようかな……」

そのまま、霧沢さんは俯き加減で何かを考えているような仕草をした。

「霧沢さん、どうしたの？」

「森村君、変なことを訊いていい？」

「どうしたの？あらたまつて。俺でよかったらなんでも答えるよ」

「……えつと」

霧沢さんはなおも何かを考えているような表情。

しばらくそうしていて、ふと俺を見あげる。

「…………あのね」

「うん」

「森村君……、あの、森村君って、一人で住んでいるの？」

「えっ？」

「えっと……。昨日もそうだったんだけど、私がチャイムを押しても、森村君を呼んでも、家族の人が出て来なかったから……」

「ああ、そういうことか。うん。あの家で俺は一人で住んでいるよ」
「えっ？本当に？」

「学生の一人暮らしってやつかな？かつこいいだろ？」

俺は俺に家族がいなくてことを霧沢さんに知られて、変に氣を使わせたくないなと思ったので、そう茶化すようにして答えた。

「そうなんだ……」

「どうしたの？」

「ううん。ごめんね。変なことを訊いて」

「変なこと？俺はともかく霧沢さんが何か氣にする質問じゃなかったよ」

「…………。うん。ありがとう」

まあ、これでいいだろう。霧沢さんに余計な心配をかけたくないもんな。

「…………。ねえ、森村君」

「ん？なに？」

「それじゃ、今日も学食？」

「ん？そうだけど……」

「あ、あのね」

「うん」

「今日も……わたしといっしょにお昼を食べない？」

「えっ？」

「いい天気だし……」

「ん？ああそうだな。霧沢さんが誘ってくれなかったら一人で寂し

い思いをしたと思うから、俺でよかつたらいつでも大歓迎だよ」

いい天気ですっていつしょに学食に行くのかよくわからなかったが、元々今日も霧沢さんとお昼を食べようと思っていたので断る理由もない。

「くすつ。うん。それじゃわたし、お昼楽しみにしてるね」

「あ、うん」

さっきまでの何か悩んでいたような表情がふっと晴れて、霧沢さんはにこつと微笑んだ。

うーん、霧沢さん、今日は突然どうしたんだろう。

まあ、いいか。

霧沢さんが楽しみにしているとまで言っていたので、お昼が気になつて授業もほとんどわのそらだった。

お昼前の授業が終わったと同時に、俺の席に霧沢さんがニコニコしながらやってきた。

「森村君」

「ん？はいね霧沢さん」

「くすつ。ねえ、お昼にしょ」

「ああ、うん。早い方が学食も席が空いているだろうし」

「ねえ、今日は学食じゃなくて、外で食べよ」

「外？」

「うん。いい天気だし」

学食のメニューを買って外で食べるってことなのだろうか。学食に近い教室では教室に持ってくるようなやつは稀にいるが、外にまで持っていくというそんなおかしい行動を取るやつはいないのだが……。

「本当に外で食べるの？」

「うん。あの中庭とかいいなっと思っていたんだ」

「ああ、そうか。購買で何かパンとかを買ってことだな」
それなら合点がいく。

「くすつ。ねえ、森村君」

「なに？」

「わたしね、今日おべんと作ってきたんだ」

「えっ？」

「あのね、それでね……、森村君のも作ってきたんだ」

「ええっ?!」

「だから外で食べない？」

「つて、霧沢さん！」

「な、なに？」

突然大きな声を出してしまった俺に驚く。

「お弁当作ってきてくれたって……。俺に？」

「うん。そうだよ」

「ほ、本当に？」

「うん。だって森村君、一昨日のお金を忘れたわたしのためにお昼をおごってくれたじゃない。そのお礼だよ」

「そう言われたらそうだけど……。でも、いいの？」

「くすつ。だって、二つ分作ってきちやったもの」

「本当に、本当に俺が貰っていいの？」

「くすつ。うん。だってその為に二つ作ってきたもの」

夢を見ているのだろうか。

この笑顔で俺を見ている女の子が、俺にお弁当を作ってきたからいっしょに食べようと言っているんだなんて。

本当に実際に起こっていることなのだろうか。

すごく嬉しくて楽しい夢を見ている気分だ。現実が信じられない。
「どうしたの？」

「いや……。俺にお弁当を作ってきてくれて、いっしょに食べよう、なんて言ってくれる女の子がいてくれたなんて、俺、嬉しくて」

「くすつ。森村君面白い」

「いや、本当だつて」

「わたしもお礼だから、ね」

「う、うん。それじゃ、行こうか」

「うん」

窓際の霧沢さんの席から見える中庭。

ここにはベンチとかあつて、植木が規則正しく植えられ、ちよつとした公園のような佇まいを見せている。

俺もよくカッブルとかがここで弁当等を広げているのを見たことがある。

胡太郎もあそこはなかなかいいといつて、俺によく勧めたものだ。もちろん、彼女を作つてという断りを入れてだが。

その時は多分、絶対にそんなことはないと思つていたのだが。でもそこに今、俺がいるのだ。女の子を連れて。

しかもその女の子が、俺に弁当を作つてきてくれているのだ。人生つて本当に何があるかわからないな……。

「森村君が何が好きかつてよくわからなかったから、色々入れてきちゃった。口に合うかわからないけど……。はい」

青々とした春の木々の木陰で、空いていたベンチに座り、霧沢さんが持つて来た弁当を受け取る。やや大きめの男性用の弁当箱だ。

「あ、ありがとう。霧沢さんが作つてきたものなら、俺、何でも残さず食べるよ」

「くすつ。ありがと」

弁当箱を受け取り、少しだけそれを眺めていた。

左には霧沢さんが座つて俺を見ている。

ああ、どうにも緊張する。

ほんとうに、これ、俺が食べてもいいんだよね……。

「開けていい？」

「うん」

俺は意を決し、包まれているナプキンをほどき、ふたを取った。

「おお……」

「どうかな？」

弁当の中身は半分がご飯になっていて、半分がおかずという構成だった。

ご飯はゆかりと細かいのりみたいなものがまぶされていて、手が込んでいる。

おかずの方はからあげに、卵焼き、たこの形のしたウインナ。切干大根に、ほうれん草のおひたし、大豆の煮物が入っている。

野菜がたくさん入っていて栄養のバランスも取れたいいお弁当だ。それに、ちゃんとおかずとおかずの間には草の形をした仕切りとかがきれいにはさんであって、見た目も完璧だ。

「すっごい豪勢だね。弁当箱も大きいし」

「そのお弁当箱はね、お父さんのだったの」

「お父さん？」

「わたしね、いつも外で絵を描いているお父さんの為にこうしておべんとを作っていたんだ」

「そうなの？」

「うん。だからなんかおべんとを作らないと朝がどうもしっくりこなくて。それでね、森村君がいつも学食だって言っていたから、食べしてくれるかなーって思ってた」

「でも、こんなにたくさん作るなんて大変じゃないの？」

「そうでもないよ。おかずは昨日のうちに下ごしらえをしておくから、朝はほとんど詰めるだけだし」

「ああ、なるほど」

「それにね、わたしの分だけだとおかずが余っちゃうし。だから」

「なるほどね。そんなことならいつでも大歓迎っていうか、めっちゃ嬉しい。ありがとう、霧沢さん」

「くすつ。森村君面白い」

「食べていい？」

「うん。お茶も持ってきたから」

「至れり尽せりだね」

「くすつ。はい」

「ありがとう」

ポットから注いでくれたお茶を受け取りつつ、俺は霧沢さんの作って来てくれたお弁当を食べ始める。

この霧沢さんのお弁当を開けた瞬間、いい匂いがして、見た目も美味しそうで、とてもじゃないが、食べたくて仕方がなくなっていた。

もうさっきの緊張感なんて忘れていた。今はすぐにこのお弁当を食べてみたいという気持ちしかない。

最初にまず、ご飯を食べてみる。

「……」

「どう？」

今度はおかずを食べてみる。切干大根。

「……」

「森村君？」

こ、これは……。

さらに、卵焼き、からあげ、大豆の煮物など色々食べてみる。

「……」

「森村君、どうしたの？美味しくなかった？」

これは。これは……。

「霧沢さん……」

「な、なに？」

「俺、こんなに美味しいものを食べるのは、何年ぶりだろう……」

「えっ？」

煮物の香ばしい醤油とみりんの匂い。から揚げのスパイス。たまごやきのふんわりした感触……。

このおかずは、昔俺の母親がよく作ってくれた料理の味がする。なんだかこういう料理がとても懐かしくて。そして、こういう料理が好きだったってことを思い出して。

この料理を出してくれた霧沢さんにすごく嬉しくなってる。

すごくじんとして……。

「ぐすつ……」

「えっ？ど、どうしたの森村君？」

「あ、なんか、涙が出てきた……」

「えっ……？」

「あ、いや、ゴメン。あまりにも霧沢さんのお弁当が美味しくて、じんとしてきちゃって。こんな美味しい手料理を食べられて、なんかすごく嬉しくなっちゃって……」

「森村君……」

「これ……、このおかず、みんな霧沢さんが最初から作ったものだよ？味付けから、煮たり焼いたりするまで」

「えっ……。わかるの？」

「うん。俺は一人で暮らしているから、こういう料理もコンビニのお弁当とかスーパ－の惣菜とかの出来合いなものを買って食べているからわかるよ。この素朴な醤油の味や、から揚げの調味料なんかも、最初から自分で味付けしないとこういう味にならないんだよな」

「うん……」

「こういう手の込んだ料理って、すごく懐かしく感じちゃって、なんだか手を込んでくれた事に嬉しくなっちゃって……。ぐすつ。あはは。ごめん、俺、すごく変だし」

「そんなことないよ……」

「なんか泣いちゃったし……。かつこわるいな、俺……」

「ううん、そんなことないよ」

「ありがとう、霧沢さん。こんな気持ちになれたの、ほんと久しぶりだ。俺、霧沢さんと仲良くなれて、ほんとよかった……」

「森村君……」

「あ、あはは。霧沢さんも食べようよ。俺一人だけ食べているの、なんだか恥ずかしい」

「あ、うん。そうだね」

霧沢さんも自分の弁当箱を開けたのを見て、俺は再び食べ始める。

「ああ、霧沢さんの弁当、すっごく美味しいなあ……。霧沢さん、ほんと料理上手いんだね……」

「もう、森村くんたら……くすん」

「えっ？霧沢さん？霧沢さん、もしかして泣いてる？」

「うつん……。あ、ごめんね。なんだかわたし、嬉しくなっちゃって。森村君がこんなに喜んでくれるんだもの。なんだか作ってきてよかったなって思ったら、じんとしてきちゃって……。くすん」

眼鏡の下から目を拭きながら笑顔で俺に向いてくれている。

「霧沢さん……」

「ありがとっ、森村君」

「お礼を言うのは俺の方だってば」

「くすっ……。そうだね。うん」

「あのさ、霧沢さん……」

「なに？」

「ひどくあつかましいお願いだと思っけど……。また作ってきてくれるかな、お弁当」

「うん。いいよ。森村君が食べてくれるなら毎日作ってくるよ」

「えっ？本当に？」

「うん。わたし一人分のお弁当を作るより二人分作った方が、材料も無駄にならないし。それに、わたし料理するの好きだから」

「それじゃ、お願いしていいかな」

「うん。それじゃお願いされるよ」

「あ、でも」

「なに？」

「俺が霧沢さんにお弁当のお礼を返せるものがない……。こんな美味いものを頂いても、なんにもお礼できないよ」

「くすっ……」

「うつん、困った」

「それなら、今度描いてくれるっていうわたしをモデルにした絵、コンクールで優勝してくれない？それが森村くんのお礼でいいよ」

「ええっ？」

「できない？」

「なんの。霧沢さんのこの、とても美味しいお弁当と引き換えなら、俺何でもやるよ」

「くすつ。それじゃ、頑張つてね」

「でも、そんなのでいいの？」

「うん」

「そっか。それじゃ、俺、頑張るよ」

「くすつ。うん。がんばつてね、部長さん」

なんだか人生最良の日が来たような気がする。

女の子が朝迎えに来てくれて。

お昼は俺のお弁当を作ってきてくれて。

その女の子をモデルにして絵を描く。

俺、こんなに恵まれていいのだろうか。

霧沢さん……。本当にありがとう。

彼氏と彼女？

最近、不思議な夢を見ることが多くなった。
小さな子供達が出てくる。

俺はその子供達のやり取りを見ている。

そして、いるはずのない、みたことのないはずの、子供の頃のリサがそこにいる。

そのリサと仲がいい男の子がいつも楽しそうに遊んでいる。

その子たちはまるで……。

「ねえ、えをかいいてみない？」

「えっ？おれが？」

「くすつ。あのね、わたしのおとうさん、えかきさんなの」

「そうなんだ」

「だからね、あなたも、えをかいいてみない？」

「どうして？」

「くすつ。どうしてかな。わたしね、あなたにもえをかいいてほしいなっておもったの」

「かいいたほうがいい？」

「うん。わたし、あなたのかいたえをみたい」

「うーん、でもおれ、えなんかうまくかけないよ」

「だいじょうぶだよ。かけるよ」

「そうかな」

「うん」

「それじゃ、きみをかいいてみたいな」

「えっ？」

「そのきみのきれいなそのめとかみのけ。かいいてみたいんだ」

「ほんとう？」

「うん。かくんだったらそのえだけだ」

「それじゃ、かいいて」

「うん。それじゃおれ、がんばってかいてみる」

「うん。きつとうまくかけるよ」

「ああ。おれがんばってみる」

その子たちはまるで……。

今の俺と霧沢さんのような二人だった。

女の子の姿が気に入って、男の子はその女の子をモデルにして絵を描く。

それは俺が、リサの絵を見ていたときに願ったそれと同じ夢。

こんな絵を描きたいって、願ったこと。

それは、今、本当に夢なのだろうか。

この夢の世界でも、現実の世界でも、違和感のない本当の世界のよう感じられる。

そうだな。

こうして楽しい世界が夢の世界だけってことはないんだよ。

これは、俺と霧沢さんがいつもしている楽しい日常の景色なんだ。昔はよく、俺は家族の夢を見ていた。

そんなときは決まって、目が覚めると憂鬱な気持ちになっていた。夢の中では楽しくても、現実には楽しくなかったからだ。

外見をいつも同じにしようとも、その外見を保とうとリサを見て自分を励まして、やっぱり俺は、弱かった。

胡太郎の言っていた通りなんだ。

本当は俺、誰かに自分を変えて欲しかったんだ。

本当は、俺に何かをしてくれて、俺を励ましてくれて見てくれる人が欲しかったんだ。

それが今、俺に、そうしてくれる人……。霧沢さんという人が現れてくれた。

もう自分に、ごまかして、嘘について、外見を保つ必要がなくなってきたんだ。

楽しいと思える現実ができたんだ。

この夢は、俺を変えてくれた象徴なんだ。

そう、思える。

いじめられていた小さな女の子を助けた男の子。その二人がいつしか楽しく遊べるような二人になって。

その二人はいつも楽しくて。

ずっとこれからも、いつしよにいられると信じられる日常にいることができる世界。

辛いことがあっても、それを助けてくれた人と楽しく暮らす事ができる世界。

それが幸せってことなんじゃないかな。

そうなんだよ。

俺は今、幸せの中にいるんだ。

ずっと、このままで過ごしていきたい。

この夢の世界のように……。

「でさ、あの時の大樹の顔ったら。そいつがまた可笑しいんだよな」
「なんだよ胡太郎。霧沢さんにそんなことまでいうことないじゃないか。恥ずかしいだろ」

「くすつ。でも、そんなことがあったのね」

「だろ？おもしろいよな。大樹って」

「なんだよ。胡太郎だって、まだ『のこうば』って言うじゃないか」

「おいおい大樹。それじゃあまるで俺があほみたいじゃないか」

「あははっ。胡太郎ちがうのか？」

霧沢さんと、胡太郎と、俺とでよくこうして話をする。

気がついたら、俺は霧沢さんといつも一緒にいた。

「まったく、あれはのこうばでいいの。それ以外の読みは却下」

「ほんの漢字一文字読み方を変えるだけでいいのにな」

「そうなのか？」

「そつだよ。胡太郎がいつも本当のことを知りたがらないからその

ままなんだって」

「じゃあ何て読むんだよ。やっぱり『やこうじょう』か？」

「それは自分で調べるんだな。胡太郎は成績いいじゃないか」

「くそう。最近大樹俺に冷たいなあ。昔はそんなやつじゃなかったのにさ」

「そうか？」

「そうだ」

「くすつ。ほんと、二人仲がいいよね」

「おう。もちろんだとも。ナ、親友」

「まあ、仕方がないな」

「ほーらな。いつも大樹はこんな調子だ。まったく、友達がいのないやつだよな大樹って。霧沢さんも気をつけなよ」

「うん。気をつけるよ」

「おい、胡太郎」

「あはは」

「まったく、二人して……」

霧沢さんはあれ以来ずっと朝に迎えに来てくれて、毎日いっしょに登校している。

休み時間にはこんなふうにも胡太郎とも交えて、たわいのないことを話して。

お昼には霧沢さんが作ってくれたお弁当をいっしょに食べて。

まあ、毎日だと霧沢さんも大変だろうから学食にする事もあるけど。

放課後になると次回のコンクールに向けての絵を描く為に、俺たちはいっしょに絵を描いていた。

霧沢さんのいなかったときに想像できなくなったほどに、俺の生活の中に霧沢さんが溶け込んでいた。

無理もない。

霧沢さんと一緒にいると、俺が一人にいるんだってことを忘れさせてくれたし、何より楽しかった。

最近じゃ、すっかりこのいつも持っていたリサの絵を見ることもなくなっていた。リサの絵を見ることよりも霧沢さんと話をするのが楽しくてしかたがない。

いや、むしろリサのことを忘れてしまっている。

持ち歩いている絵を見なくなったことはもとより、家に置いてあるリサの絵も最近じゃ出してもいない。

リサのような絵を描きたいというよりも、霧沢さんをより綺麗に描きたいと思っできているのだ。

そんな毎日が、霧沢さんと出会ってから1ヶ月、続いていた。

今日も、いつものそんなあたりまえになって来た日常の一つだった。

「それでそのときさ、胡太郎はホストになるって言ったんだよ」「ほすと？」

「ああ、あの郵便局の前にある赤い箱の事だよ霧沢さん。Tの字の上にもう一本線があるマークをつけたおしゃれなやつだな」

「胡太郎、それはポストだろ？」

「あれ？」

「あはは。でも胡太郎には似合っていないか？」

「ああ、わかったよ。俺はポストになるさ。色んな人の手紙を受け取り、配るのさ。雨にも風にも負けずに毎日ナ」

「ああ、がんばってくれ。応援しているぞ」

「なんだよ大樹。せっかく俺が一人ぼけとのりつつこみしたのに、本気にするなよ」

「あはは」

「くすっ」

「そういえば大樹。最近笑うことが多くなってきたな」

「えっ？そうか？」

「そうね。大樹君、いつも楽しそうにしているよね」

「昔はいつも顰めつつらで、俺が遊びに誘っても冗談を言っても、たいして楽しそうな顔をしていなかったのにな」

そう言われれば、俺、前まではそんなに笑っていなかったような気がする。胡太郎と二人だった時は楽しかったが、笑っていたという思い出がない。

「やっぱり彼女ができると男は違うか。いいことだな。森村君」

「えっ？彼女？」

「彼女？」

俺たちは顔を見合わせた。

「ん？なんだい。お二人さんともにとぼけちゃって。お前達二人の事はもうクラスの公認になっているんだぞ。しかも最もいいカップルとかって噂の種だ。他のクラスの連中まであんな二人になりたいという目標にもなってるくらいなんだぞ」

「そうなのか？」

「そうなの？」

「なにを言うか。毎朝いつしよに登校してきて、霧沢さんが大樹にお弁当を作ってきてくれている。それに放課後になると二人だけで部活動に励む。かー、絵に描いたようなラブラブカップルじゃないか。皆が冷やかしたりどちらかに声をかけたりしないほどだからな。ほんと完全無欠のお似合いカップルだ。はあ……俺もお前らのようになつてみたいわ。あ、そうか。俺邪魔者だった見たいだな。俺はそろそろ退散するとするわ。お前らは今日もこれから部活なんだろう？」

「ああ、そうだけど……」

「それじゃ、俺は帰るわ」

「胡太郎、もう帰るのか？」

「ああ。俺は今日もこれから約束があるのでナ」

「そうか。ならしかたがないな」

「ああ、そうだ森村君」

「なんだ？」

霧沢さんに聞こえないように、俺の耳に近づいて話す。

「いくら好きあっているって言っても、ちゃんと避妊はしないとダ

メだぞ。特に学生のうちはナ。それが思いやりつてもんだ」

「胡太郎！」

まったく、何てことを言うんだ。

「あはは。それじゃあな大樹。霧沢さんも」

「それじゃあね、吾妻君」

「まったく……、それじゃあな、胡太郎。また明日」

「ああ。それじゃ」

胡太郎がいつものように後ろ手で手を振りながら帰っていく。

教室で霧沢さんと二人きりになった。

「ねえ、大樹君。わたしたちカップルだって」

霧沢さんは俺を見上げるようにして微笑んでいる。

「らしいな」

うーん。それにしても色んな意味で複雑だ……。

俺はそんなことを意識しないで霧沢さんと接していたのに、あたりの連中は俺たちを恋人同士だと見ていたらしい。

胡太郎はよく誇張して物事を伝えることがあるが、嘘は言わないので、本当のことなんだろう。

よくよく考えると無理もない話だとは思っけど。

「ねえ、大樹君」

「ん、なに霧沢さん」

そついえば霧沢さん、いつのまにか俺のことを名前で呼ぶようになっていたな。それに前に比べてずいぶん積極的になっているような気がする。

「あのね。わたし一つお願いがあるんだけど……」

「お願い？ なに？」

「この際だから、本当に恋人同士ってことにしない？」

「えっ？ 恋人同士？ えっ？ それって？」

「もう。わたしの彼氏になってよ、って言っているの」

「……彼氏？」

「もう、大樹君。大体、こう言う事は男の子から言うものじゃない

の？ こうして言うのもわたし、すつごくどきどきしているんだから」

「でも、彼氏彼女って、一体どういうことをいうの？」

「うーん、そう言われるとわたしもよくわからないかな。でも、お互いにそういう意識をもつことが大切っていうことらしいよ」

「そうか、そういうものか」

「うん」

「それよりもさ、俺みたいな男が彼氏でいいの？」

「大樹君こそ、わたしじゃ嫌？」

「そんなことない」

「そんなことないよ」

見事に二人ではもってしまった。

「……」

「……」

ばつが悪くなつて霧沢さんから目を離れた。

なんだか本当に息があっているんだな、俺たちは。

「あ、あはは」

「くすっ……」

「それじゃ、これからもよろしくってことで」

「うん」

「まあ、今までとそれほど変わるものじゃないと思うけど……」

「くすっ。そうだね。あ、それじゃお願いがあるかな」

「なに？」

「わたしのこと、名前の方で呼んで」

「えっ？」

「わたしの名前は、霧沢美裕。美裕って呼んでみて」

「えっ……は、はずかしいな」

「ほら。わたしの彼氏さんになるんだから。いつも『霧沢さん』じゃちよつと嫌かなって思ったの。だから、ほら」

にこにこしながら俺を見上げている。

女の子を名前で呼ぶなんて、すっごく恥ずかしくて霧沢さんを見ていられなくなってくる。

「えっと……みひろ……」

「なに？大樹君」

ほんと嬉しそうな笑顔を向けてくる。

俺は耳まで真っ赤になってるかもしれない。

「やっぱり恥ずかしいな……」

「そう？」

「あのさ、それじゃ、美裕…も俺のこと呼び捨てにしてくれない？」

「えっ？」

「俺は大樹。大樹って、呼び捨て」

もう恥ずかしくて照れてしまって、美裕にも同じ気持ちを感じて欲しくて。

「えっと、えっと……。大樹……君」

「あはは。美裕だって照れてるじゃん」

「もうっ。大樹君！」

美裕も顔が赤くなっていた。かわいい。

「ほらほら。俺の彼女なんだから、他人行儀の君付けはなしだよ。美裕」

「あー。なんだか大樹く…はもう慣れてる……」

「あはは。美裕は美裕らしいな。と、もうこんな時間になっちゃったな。早いとこ部屋に行こう」

「あ、そうだね」

「続きは部屋で」

「わたしは負けないから」

「俺も負けない」

「くすっ……」

「あはは……」

二人でいつものように部屋で絵を描く。

俺はコンクール用の絵を描く為に、霧沢さん…じゃない、美裕と

はいつものようにこうして向かい合って絵を描いている。

ああ、今日からこの女の子が俺の彼女なんだよな……。

スケッチブックと俺を交互に一生懸命見ている美裕。

なんだか意識すると美裕を見るのが恥ずかしくなってきた。

でも、こんな恥ずかしさは嫌じゃない……。

やっぱり俺、果報者かもしれないな。

俺の彼女になってくれた美裕に、俺、いろんなことをしてあげたい。優しくしたいって気持ちでいっぱいだった。

緑の瞳

「ねえ、大樹」

「なに？」

ふと美裕がスケッチブックから顔を上げて俺に話し掛けてきた。

「前に……大樹が絵を描くきっかけになった絵があるって、言っていたよね」

「あ、うん」

「その絵、よかつたらわたしにも見せてくれないかな？」

「えっ？見たいの？」

「うん。本当は前からちょっと気になっていたの」

「うーん、でもちよつと恥ずかしいかな」

「恥ずかしい？」

「正直に言うとき、俺、その絵のこと、好きって言うよりも惚れていたんだ」

「惚れていた？」

「ああ。なんていうか、人を好きになるって感じに近い感情をその絵に持ったんだ。そのおかげで俺は辛かったことから立ち直れることができたんだけど……。だからさ、なんていうか、そういうの普通の人っぽくないだろ？絵のことを好きなんて、なんだかっこ悪い感じがして恥ずかしい」

「そんなことないよ」

「そうかな……。でも、その絵は女の子の絵だし……」

「でも、大樹がそんなに好きになるくらいの絵なんだから、きっとすごく綺麗な絵なんだよね。だったらなおさら見てみたいな」

「うーん、そんなに見たい？」

「うん」

美裕はにこつと笑顔を見せている。そんな顔をされると俺はどんな事も断れない。

まあ、俺の彼女の美裕にだから隠し事はしたくはないし、見られても絵なのだから別に問題になるものでもないから、いいか。

「それじゃ……。えっと、本物は家にあるんだけど、写したものでよければここにあるよ」

「ほんと？」

「ああ、この絵なんだけど……」

俺は上着のポケットから最近ほとんど見なくなっていたりサの絵を取り出して美裕に見せた。着たきりの制服の上着だ。忘れる事はない。

「そういえば俺も久しぶりにこの絵を見るなあ……」

「この絵……」

「どうしたの？」

美裕はその絵をじっと見て、遠くを見るように目を細めていた。

「もって、たんだ……」

「えっ？」

「大樹……」

美裕は座っていた俺の正面に立ち、俺をじっと見つめてきた。

「美裕？」

「あのね……」

「なに？」

「やっぱり、わたし、大樹のことを知っていたみたい」

「えっ？知っていた？」

「この絵に描かれている女の子はね……。わたしの」

「えっ？どういうこと？」

「だって、この絵は、わたしのお父さんが描いたものだもの」

「美裕のお父さんが？」

「うん。ほら、この片隅に『 r i s a 』って文字が書いてある

よね」

「う、うん……」

この絵の女の子の名前をリサとつけたのはこの文字があったから

だ。

「わたしの苗字は霧沢だよね。ローマ字にすると『kirisawa』ってなる」

「ああ」

「お父さんは名前の『ki』と『wa』のところを伸ばした感じにして『risa』って銘を打ったの。銘っていうのは自分が描いたってしるしなんだけど……それをね、こんなふう絵の片隅に書いたの。だから……。これはお父さんが描いた絵なの。そしてこの絵はわたしのお父さんが、小さい頃のわたしをモデルにして描いた絵」

「小さい頃的美裕をモデルにしたって……。でも、この絵の女の子は俺たちと同年齢に見えるよ」

美裕が言っていることが、信じられなくて。

でも、もし、それが本当のことだったら。

「うん……。それはね、お父さんがわたしを見て、わたしの小さい頃亡くなってしまったお母さんと重ねあわせて、未来のわたしを想像したものなんだよ」

「でも、この女の子の瞳……。虹彩は緑だよ」

美裕の瞳を見つめた。

でも、美裕の瞳は髪と同じ漆黑だった。

「……大樹」

「なに？」

「驚かない？」

「うん」

「あのね、それじゃ、見せてあげる。大樹はわたしの彼氏だから」
そう言って、美裕は眼鏡を外して屈み、手で目を触って何かをしていた。

「わたし、本当はいつもコンタクトをしていたの。虹彩の色素が薄いから紫外線を受けやすく、明るい所にいると眩しくて見られなくなっちゃうから、学校にはしていけないサングラスの代わりのよ

うに使っているの。眼鏡は色付きコンタクトだってわからないようにするための伊達眼鏡……」

そう言っ、俺のほうを見た美裕の両目は、リサの絵と全く同じ……。

緑色の虹彩を持っていた。

「ほら……。わたしの瞳、緑色でしょ」

いつも見ていたあのリサの瞳とまったく変わらない綺麗な緑色。森の新緑。初夏の樹々が生き生きと見せるあの緑色。

俺をじつと見つめてくれる美裕の瞳に、俺は吸い込まれそうになっ、ていった。

心臓がドキドキしていた。その音が美裕にまで聞こえそうに思えるほどに。

夢じゃないのだろうか。

「美裕……。それじゃ、本当に……」

「うん。わたし、特異体質なんだ。こんな緑色の瞳を持つ人なんてほとんどいないんだって。おかげですごく目立つからそれを隠す為にもこれが必要だったの。昔は気持ち悪いってずいぶんいじめられたりもしたんだ。でもね、お父さんもわたしのこの瞳を見て、すごく綺麗だっ、て言っ、てくれて。この絵を描き残したの」

「……」

もう驚く事なんか無いと思っ、ていたのに。

美裕がリサだったなんて。

俺は、俺は……。

「それでね……。もう一人。お父さんの他にわたしのこの瞳を好きだっ、て言っ、てくれた人がいたの。その人に、別れるときお父さんはこの絵をあげたんだ」

「それじゃ、もしかして……」

「大樹。あなたのことだよ」

美裕の緑色の瞳が俺をじっと見つめていた。

そうだ。この瞳を見るのは初めてじゃない。

ずっと昔、すっかり忘れてしまったほどの昔、俺はこの子を見たことがある。

はつきりとした既視感。

そうだ。

その女の子が俺の初恋の女の子だったんだ。

俺はその子のことを、本当は知っていたからリサを好きになったんだ。いや、知っていたからリサを代わりにしたんだ。

その女の子がいなくなってしまったから、その思い出のカケラ、心に残っていたほんの少しだけの情景を糧として、その面影の残るリサに、俺は今になって、心惹かれたんだ。

本当のこの絵の女の子がいなくなってしまったから、いないと思っ
っていたから……。

そうなんだ。あの夢を見たのもその為だ。

あの夢もきつと、俺に起こった出来事を、忘れてしまった中で、無意識の俺の記憶から見せたものだったんだ……。

「そうか……。そうだったんだ。だから俺は、この絵の女の子を好きになったんだ……。俺は自分でも忘れてしまった記憶の中で、無意識のうちに美裕のことだけを思い出して、それを投影して……。

この絵のことを。そうか……。そうだったんだよな」

「大樹……」

「でもさ。俺は、この絵の女の子の事を好きだったけど……。この絵の女の子のモデルがいるかもしれないって思ったことがあったけど……。俺はそれが最初から美裕だってことはわからなかった」

「うん。それはしかたがないよ」

「それにさ。本当は俺はもう、この絵のことはどうでもいいんだ。確かにこの絵を見て俺はこんな絵を描きたいって思っていたけど、この絵の女の子に惚れていたけど、今は違う」

「違う?」

「俺は今、美裕を……俺の目の前にいる女の子を描きたいって思っているんだ。その絵はもう今のきっかけにしか過ぎない」

「大樹……」

「俺は、美裕が俺と逢った時から優しくしてくれたから、今の美裕を好きになっただ。美裕のことを好きになっただ。絵は昔の事を思い出せたきっかけかもしれないけど……。美裕が俺と出逢ったときからの美裕だから俺はこうして美裕といっしょにいる。それじゃ、だめかな？」

「くすつ……。大樹はいつも、わたしが思っていることを先に言うてしまうのね」

「えっ？」

「わたしも、そうなの。きっかけは昔の大樹を思い出したから。わたしはこの学校に転校してきたときに大樹を頼ったの。でも、大樹は昔のわたしのことなんて覚えていない様子もなかったし、そんな話もしなかったよね」

「うん？ああ」

「でもね、わたしのことを憶えてなくても、大樹はあの頃と少しも変わらずに優しいままでわたしに接してくれた。たくさん気を使ってくれて。優しくしてくれて。それが、嬉しくて。だから、昔の事を忘れたままでも、わたしの知っている大樹じゃなくてもいいって思ってた。だって、過去のことなんか良くて、こうして、今のわたしを見てくれているんだもの」

「ああ。俺は今の美裕が好きだ。それは嘘じゃない」

「くすつ。だからそんな大樹がわたしも好きになっただの」

美裕が俺に抱きついてくる。

ふわっと、美裕の甘い、女の子の香りが俺を包み込んだ。

「だから、大樹は、私の彼氏さん」

「美裕……」

俺も美裕を抱きしめた。

美裕は俺を見つめていた。

そのまま、美裕の瞳が閉じていく。

俺は、こうなる事が当然だと思うように、美裕の唇にそっと口付けた。

暖かく柔らかい美裕。

俺が以前、リサに望んで、想像した感覚が、ここにあった。

「大樹……」

「美裕……」

ゆっくりと開けられていく緑色の美裕の瞳。こうしてみると、美裕は最初からこんな瞳をしていたってことに、違和感なく感じられた。

「美裕。その瞳、本当に綺麗だな……。こんなに近くで見て、俺、美裕に吸い込まれそう……」

「くすつ……。ありがとう、大樹」

「でも、ごめんな。今まで昔の事忘れてて。覚えていた方がかつこよかったんじゃないか？」

「うん。いいのよそんなこと。だって、大樹はこの絵をまだ持っていて、この絵の女の子を好きだって言うてくれて、こんなに大切にしてくれていたんだから。それでね」

「美裕……」

「わたし、大樹の恋人で、いいよね」

「ああ。もちろん。こんな俺でいいならずっと美裕の恋人をお願いしたい」

「くすつ……」

「なあ、美裕。一つお願いがある」

「なに？」

「今度からさ、その瞳をここだけでいいから、見せてくれないか？俺、美裕のありのままを描きたい」

「くすつ。いいよ」

「ありがとう」

「うん……」

「よし、俺はこれから頑張る」

「くすつ。うん。がんばってね。大樹」

「ああ。この美裕のお父さんが描いた絵のように皆が心惹かれるような美裕を描いてみせる」

「あ、でも、それはちよつと嫌かな」

「どうして？」

「わたし、大樹以外の人に好かれるの、困る」

「あはは」

「くすつ」

美裕がリサだった。

なんていう偶然なんだろう。

お互いに過去のことを忘れていても、こうして出会えて、仲良くなつて。

再び、あの時の頃と同じように、二人でいっしょにいられるようになって。

これが、もしかして、見えない赤い糸というもので結ばれていたってことになるのだろうか。

でも、そんな偶然、すごく嬉しい。

俺の愛した絵の中の女の子が現れたのだから。

やっと見つけた。

俺の幸せ。

もう大丈夫だ。

俺はこれからも生きていける。

この美裕が俺のそばにいてくれる限り。

「よし、みひろ、できたぞ」

「えっ？たいき、できたの？」

「これだ」

「わあ。たいき、おもったよりじょうずだね」

「なんだよ、そのおもったよりって」

「くすつ。ごめんね」

「それでさ、このえをみひろにあげる」

「えっ？ほんと？」

「ああ。そのためにがんばってかいたんだ」

「たいき……」

「このえをみて、おれのことおもいだしてくれるよな」

「うん。わたしぜったいたいきのことわすれないよ」

「ほんとうか？」

「うん」

「おれも、おまえのおとうさんからもらったみひろのえをみて、ずっとみひろのことをわすれないからな」

「うん……」

「それでさ、もし、またであつたら、そのときまでにおれはもつとえのれんしゅうをしてうまくなって、またかいてあげるからさ」

「ほんと？」

「ああ。おまえのおとうさんよりもうまくかいてみせるさ」

「くすつ。おとうさんよりもうまくなんてかけないよ」

「いや、やってみる」

「うん。それじゃ、たいき、がんばってね。わたしはかならずもどってくるから」

「ほんとうだぞ」

「うん。だって、わたし、たいきのことかだいすきだから」

「えっ……」

「だから、ぜったい、ね」

「ああ。おれもぜったい」

美裕は、その緑色の目の所為で、明るい所が見られないらしい。その為に、病院に行く事になり、それを兼ねて画家の為に放浪していた父親と遠くに行く事になってしまった。

でも、それは今生の別れじゃない。

俺は美裕に俺が描いた絵をプレゼントして、またいつか出会えるときに美裕の父親が描いたより上手い美裕の絵を描けるようにと約束して。

いつかきつとまた、出会えることを約束してた。

それが、今、かなったんだよな。

美裕。

俺、まだ美裕のお父さんのようには上手くかけないけれど、これからもつとがんばって美裕を描くからな。

絶対……。

不安

美裕の瞳のことを知って、一週間が過ぎた。

あれから俺たちは今までと変わりなく過ごしていて。俺の絵もちやくちやくと描けてきている。もうすぐコンクールがある。このままいくとコンクールに入賞間違いなしだろう。先生からもお墨付きを頂いている。俺も自信を持っている。

これもみんな美裕のおかげだよな。ほんと。

今日もまた、俺たちはお互いに向かい合って絵を描いている。

眼鏡を取り、緑色の瞳を俺に向けている美裕は、本当に綺麗だ。

伊達とはいえ、眼鏡をかけている美裕もかわいいけれども。

ああ、俺、こんなかわいい女の子の彼女なんだよな。

いつも思うけど、本当に嬉しい。

「ねえ、大樹」

「ん？なんだい？」

「あさつての日曜日、どこかに遊びに行かない？」

「えっ？」

「あのね、学校でこうして話したりしていたけれど、二人でどこかに遊びに行かなかったよね。だから、休みの日にどこかに行くのもいいかなって思ったの」

「そうだな。そういうのもいいかもしれない」

今までは休みの日に女の子を誘って遊びにいくなんて、想像しただけで恥ずかしくなってしまうたから出来なかったのだ。

でも、美裕とだったら、それも関係ない。

「うん。それじゃ、あさつてね」

「あ。でも」

「なに？」

「俺、美裕をつれていけるような場所を知らない」

「くすっ。そんなの何処でもいいよ」

「でもなあ……。何処でもいいって言ってもなあ。俺はいつも胡太郎と歩いていたから男っぽい所しか知らないし……」

胡太郎とよく行くゲーセンとかに連れて行っても、美裕は楽しくないだろうし……。

「それじゃあね、公園でも行かない？」

「公園？」

「うん。駅の向こうにある木がたくさん植えられている、ちょっと大きな公園」

「ああ、えっと、そこは寂時公園といったかな。そこだね。うん、いいね」

「わたしね、風景も描いてみたいなって思ったの。お父さん、あそこで風景画をよく描いていたし」

「そうか。絵を描くか。そういうこともできるってことか。別に深く考える事もなかったんだな」

「あ。もしかして大樹、今変な事考えていたんでしょう？」

「えっ？ あ、あはは。そんなことないって」

「もう。大樹ってえっちだよな」

「ちよつと待てよ美裕。そこまで俺は考えていたわけじゃないぞ」
「ふーん」

遠くで俺を見ているみたいな目で俺を見る。いぶかしんでる……。

「本当だって」

「それじゃ、そこまでって、どこまでなの？」

「……うっ」

「くすっ。やっぱり大樹ってえっち」

「もう、美裕、いじわるだな……」

「くすっ。だって大樹面白いんだもの」

「あー。また俺をからかったんだな」

「くすっ。ごめんね」

「でも、正直に言っと、本当はちよつとだけ思ってたかな」

「えっ？ そうなの？ それじゃあいいよ。大樹だし」

「えっ？ ほ、本当に？」

「くすつ。もう、大樹はー」

「あはは。でもほんと、外に出歩きたいよな。最近天気もいいし」

「それじゃ、あさってね。わたしおべんと作ってくるね」

「ほんと？」

「うん。だから、午前中からいこ」

「よし、それじゃ、明日の為に今日はこれくらいにして帰ろうか」

「もう。大樹。行くのは明日じゃないよ。まだ明日一日あるんだよ」

「あ、そうか」

「くすつ……」

ああ、美裕はほんとかわいいな。

あさってか。今日のように晴れるといいな。

わくわくしていると一日が経つのが早い。他の事を考えないでそのことばかり考えているからすぐに時が経つような気がする。

いよいよ明日は美裕と遊びに行く。美裕と休みの日に出かけるなんて初めてだ。いや、女の子とこうして出かける……デートをするってこと自体初めてなわけで。否応なしにドキドキしてくる。

「そうだな……明日はどんな服を着ていこうか。制服なんて着られないし……うーん」

こんな事なら胡太郎と出かけた時にもっと服とかを買っておけばよかった。

ああ、俺余計な事を考えてる。まったく、かわいい彼女がいると変に舞い上がってしまうんだな。別に普通にしていればいいじゃないか。いつも会っている美裕なんだし。

まあ、かわいい彼女の為にカッコいい彼氏を演出したいとも思うけれども、なんだかそういうのは俺の性にあっていないような気がする。

「そうだ。今度美裕に俺の服を選んでもらうとかしよう。美裕が俺に似合っているって言う服を着ればいいんだし」

そうと決まれば、明日着ていくのは無難なところで比較的俺の気に入っている服を選ぶ事にした。

で、明日公園の後はどうしよう。

「うーん、最後はやっぱ俺の家に来ないか、かなあ。それじゃ、ちゃんと家のなかを片付けておかないと……」

部屋を見渡しながら俺は家の中をうろつろと動き回る。

「リビングと俺の部屋を片付けて……」

俺の部屋か……。

俺の家に来るってことは俺の部屋に美裕が来るんだよな。

俺の部屋に、美裕と俺のふたりだけ……。

「……」

なんだか想像してしまったら、ドキドキして顔が赤くなってきた。って、俺は何を考えているんだよ。まったく、胡太郎の言っていたことなんて気にする事ないんだし。

ああ、でも、楽しみだな。明日。美裕はどんな服を着てくるのかな。だいぶ初夏の陽気になってきたから、薄着かな。

美裕は結構スタイルいいしなあ……。

手足や腰は細いし、それでいて出ているところはちゃんと出ているし……。

ああ、俺はあの子を抱きしめたんだよなあ……。

美裕、結構胸大きかったんだよなあ……。

「……」

って、変なことを想像したらだめだって。

「はあ。やっぱ俺、えっちなのかも」

どうも家の中にもいるともやややして仕方がない。買い物も兼ねて少し出かけよう。食料品とかはもう底をついている。

外に出る仕度をし、外に出たら、あたりはもう真っ暗になっていた。時計を見ていなかったなので失念していたが、いつのまにか遅く

なっていたようだ。

こんな事なら先に買い物を済ませておけばよかった。

明日の事に舞い上がって俺は何をやっているのだから。

半分小走りで近所のスーパー等に行き、食料品やらを買い込む。

「おっと、明日なにか役に立つようなものを買っておいたほうがいいかな……」

ついでに、出かけるときに役に立ちそうな日用品やら雑貨やらも買っておいた。

両親が亡くなったとき、俺に両親からの多額の保険金やら慰謝料やら遺産やらが入ってきたので、俺が社会に出て稼ぐようになって、しばらくは食べていけるだけのお金はある。税金とかで大分減ってしまったけれども、ひよつとしたら一生働かなくても生きていけるだけのお金があるかもしれない。こんなお金なんかあっても、とも思っけれども、俺が生きていく上ではやはりお金は必要だった。だけど俺はつまらない事でこのお金を使いたくなかった。いつも必要最低限の生活ができるお金だけを使うようにしていた。自分の変な欲望から出た余計なものなど一切買っていない。

……使い道を知らないだけかもしれないけど。

「よし、こんなもんかな」

買い物済ませ、夜の街並みを歩く。

そうしたら、ふと思いついた事が出来た。

「明日、美裕と行く所を見て帰ろうか」

美裕が行こうと言っていた寂時公園は、ここからさほど遠くはない。ただ、俺の家からは結構距離がある。まあ、俺は一人暮らしだし、遅くなっても誰かにはばかる事はない。

というわけで、俺は一人、夜の公園に来た。

さすがに人影が少ない。こういう公園にいそうなカップルもまばらだ。もう少し季節が進むともっとたくさんのカップルが歩くところだろうが、まだ夜は少しだけ肌寒い。いくらい場所だからって言っても、なかなかこんな時間に出歩こうなんてそんなには考え

ないらしい。

おかげで、目の居所に困ることなくこの公園を一人で歩く事が出来た。

「そういえば、よくここで遊んだ思い出があるな……」

美裕と遊んだ記憶は少ないが、胡太郎と遊んでいた記憶はたくさんある。

歩いていたら、公園の遊戯台が置いてあるところに出た。

砂場や、ブランコ、滑り台、シーソーなどが夜の電灯に照らされて寂しそくに佇んでいる。

そんな公園の遊戯台達は、思ったより小さくなっていた。

「なんだか、懐かしいな……」

そんなことを思いつつ、そこを通り過ぎて公園の池を取り囲む木々の茂った遊歩道を歩く。

「ん？ この辺なんか、絵になるかもしれない」

俺は薄暗い景色を両手の人差し指と親指で長方形を作り、そこから覗く。

右には池があつてなかなか趣がある。ベンチもあるしここで座つて描くのもいいかもしれない。

よし。明日、この辺で美裕と絵を描こう。きっといい絵が描けると思う。

「明日、楽しみだな……」

一通り公園をまわり、公園を出ようとしたとき、ふと、一組のアルバイトが目が行った。

さっきまでに見ていたカップルとかだったら気にも止めなかったのだが、何か口論しているようだった。それに、その二人は俺の知っているような二人だったので気になった。

「あれ……。あの二人は」

少しだけ近づいてみる。薄暗くて遠くがよく見えないが、この位置からでもその二人が誰なのかはつきりとわかった。

「胡太郎と……美裕？」

二人は街灯が照らす下で話し合っている。

「何を……話しているのだろう」

俺のいる所までは二人の声はほとんど届いてこない。それに俺の周りは暗いので、俺がここにいる事は二人には気がつかないはずだ。でも、なんで俺はここで二人を見ているだけなんだ？ 近づいてその二人と話してもいいじゃないか。あの二人とは俺がこうして変なふうにはばかる間柄じゃない。

しかし、何故かここから一步も踏み出せなかった。あの二人に今会うことが自分にはできそうになかった。

ただ、きつとたまたまこの公園に来た美裕と胡太郎がばったり出会っただけなんだろう。それだけだ。そう思いたかった。でも。

こんな時間。しかも俺の近所にある美裕の家はもとより、胡太郎の家もここから結構距離がある。来ようと思わなければ来れるところではない。

そうすると、どちらかがここに呼び出したということになるのではないだろうか。

そうだとすると、何のために？

今話していることは俺に聞かれては困るような話なのか？

二人だけになって話さないとだめな事なのか？

それは、一体、どういうことなんだ？

二人はずっと何かを話している。

時々かすかに俺の名前を言っている美裕の声が聞こえてくる。

気になる。

でも、それでもどうしてもあの二人に声をかけることが出来なかった。

やがて、胡太郎と美裕は並んで公園を出て行く。

ついていくか、このまま帰るか、どうしようかと逡巡したが、美裕も胡太郎も俺に隠し事をするような二人じゃないし、何かあるのだったら明日美裕が話してくれるはずだ。

そう思い、俺は帰ることにした……。

しかし、家に着いても、あの二人の事が気になって仕方がない。
この気持ちはなんだ？

この嫌な気持ちは一体何だって言うんだ。

俺はあの二人を信頼している。

胡太郎は幼なじみで、俺をよくからかったりするが、それは俺を楽しませようとするもので、決して悪意はない。胡太郎は俺にかけひなたなく接してくれて、隠し事なんてお互いすることもなかった。心からの親友だって言える。

美裕は俺のことを好きだって言うてくれたし、俺も美裕も今でもお互いに何でも話せる。

なにしろ、美裕は俺の彼女なのだから。

それなのに、どうして俺に何にも言わずに二人でいたんだ？

ただ二人で話をしていただけならいいさ。

でも、なんでこんな時間に、あの公園にいくちゃいけないんだ？
わからない。美裕も胡太郎もあの公園に行くなんて話をしていたな
かった。

どうして俺だけのけ者なんだ？

ああ、なんだかもやもやしてこの気持ちは嫌だ。

そうだ、電話を試みよう。

あれからしばらく時間が経っているのだから、美裕も胡太郎も家に帰っているはずだ。

美裕とは電話でよく話をする。それを口実にちよつと訊いてみればいいんだ。さっき公園で美裕を見たけど、行っていたのか？つて
ぶるるるる。
ぶるるるるる。

ぶるるるる……。

美裕に電話をかけてみたが、電話に出ない。

おかしい……。

今度は胡太郎にもかけてみた。

胡太郎は携帯電話を持っている。電話に出ないなんてことはないはずだ。

ぶるるるる……。

ぶるるるる……。

がちゃ。

出た。

『はい、吾妻胡太郎です』

「あ、胡太郎か？俺だよ」

『ああ、すまないな。今俺ちよつと電話に出ることが出来ないんだ。ごめんな。また後で絶対かけなおすから名前をよろしく。このあと発信音が出るから……』

「留守番電話……？」

どういうことだ？

二人とも電話に出ないなんて。

ますます不安になっていく。

胡太郎と美裕が夜に二人だけにいる……。

何をしているんだ？

どうして俺に何にも言ってくれないんだ？

ああ、こんな気持ちは嫌だ。

でも、俺はどうしたらいい？

どうすればこんな嫌な気持ちを無くせるんだ？

「……」

一度大きく深呼吸をした。

ばかだな、俺。

そんなことを考えて、いつも優しく俺に接してくれている二人を疑うなんて、俺はなんてひどいやつなんだ。

美裕が電話に出られないのはお風呂に入っているとかがからかもしれないし、胡太郎はいつものように女の子といえるから電話を切つて

いるだけなのかもしれない。

大丈夫だ。あの二人が、俺をのけ者なんかにしたりはしない。
それだけは信じられる。絶対だ。

明日美裕と遊びに出かけるんだ。その時に訊けばいい。
きつとたいしたことじゃない話になるだけの事だ。

俺のいつもの日常がいきなり壊れてしまうことなんて、もうない
はずさ。

もう、二度と。

雨

次の日。

でも、俺はほとんど眠れなかった。

明るくなつて来たときから聞こえてきた音が、眠れなかったための朦朧としている俺の頭を覚まさせる。

ザ。

天気と言うヤツはどうしてこう俺の思いを裏切るんだ？

その雨は激しく降り続いていた。

早朝からやっているテレビの天気予報を見ても、梅雨のはしりが始まったとかで、今日一日はずっと雨ということを何処も口をそろえていた。

雨という憂鬱な景色も俺の心を重くさせた。とても絵なんか描けるような天気じゃない。

「美裕は……。もう起きているだろうか」

普段学校に行く為に起きる時間。

俺は美裕に電話をかけようとした。

受話器を持つとしたそのとき。

ぴろぴろぴろ。ぴろぴろぴろ。

気が抜けるような家の電話のコール音。

逆に電話がかかってきたようだ。

「美裕……かな」

がちや。

「もしもし。森村です」

「……、ああ、大樹か」

「胡太郎？」

「起きていたか？」

「ああ。大丈夫。起きていたよ。どうしたんだ？こんな朝早くから」
声が小さく元気がない。なんだかいつもの胡太郎の声じゃない。

本当にどうしたと言った。思い出したくないのに昨夜の事を思い出してしまう。

やはり美裕と何かあったのだろうか。
嫌な気持ちが膨らむ。

「この雨の中すまないが……。ちょっと出てきて俺と話をしてくれないか？」

「どうしたんだよ胡太郎。お前らしくない。電話じゃダメなのか？」

「ああ。どうしても会って話をしたい」

「でも、俺、これから美裕と約束がある」

「その……、霧沢さんのこともだ」

「えっ？どういうことだ、胡太郎」

「電話では言いたくない……。だから会って話をしてくれ。頼む」

「……」

「頼む」

「……わかった。何処に行けばいい？」

「なあ、あの公園……、覚えているか？」

「昔遊んだあの寂蒔公園のことか？」

「そうだ。俺は、そこに行くから」

「今からか？」

「ああ。頼む」

「わかったよ」

「すまないな……」

「ああ」

「それじゃ」

ぷつつ。つー、つー、つー……。

美裕のことで話があるってどういことなんだろう……。

やはり昨夜のことなのだろうか。

それならちよいどいい。胡太郎に訊けばいい事だ。

でも。なんだろう、この嫌な緊張感は。

あんなふうに真面目ぶった口調の胡太郎の声を聞くのは初めてだ

からか？

「くそっ……。もう嫌だつてのに！」

これから胡太郎に会いに行かないといけなくなった。美裕に一応電話を入れておいたほうがいいか……。

美裕が胡太郎と何かあったにせよ、昨晚のことは俺は知らないことなのだから。

数分逡巡した後、俺は美裕に電話をかけた。
ぶるるる……。がちゃ。

「はい、霧沢です」

よかった。今度は出てくれた。美裕の柔らかい声に少し安心する。

「ああ、美裕か？俺だよ」

「あつ。大樹……」

「なあ、今日雨降っちゃったな」

「そうだね……」

なんだかいつもの元気がない。

「どうする？美裕。今日は絵を描けそうにないよな。せつかく美裕とのデートなのにこの雨はないよな」

どうするも、俺はこれから胡太郎に会いに行くというのに。

何を美裕にごまかしているんだ、俺は……。

「……」

でも、美裕は何にも言わず、ただため息のような声が聞こえただけだった。

「美裕？」

「……。ごめんね大樹。今日ちょっと具合が悪くなっちゃって」

「えっ？具合が悪いって……。美裕、大丈夫か？」

「うん。でもたいしたことないから大丈夫だよ」

「本当か？」

「うん。大丈夫だから」

「そうか……。それじゃ、仕方がないな。雨も降っちゃったし、今日は取りやめにするか」

「うん……。ごめんね」

美裕の声が聞き取れないほどに小さい。

「美裕、本当に大丈夫なのか？」

「うん……。大丈夫だから。明日は学校にいけるから」

「本当だな？本当に大丈夫なんだな？」

「うん……。心配かけてごめんね、大樹」

「そうか。それならいいんだ」

「うん。ごめんね、今日」

「いや、今日は雨の所為にするから。美裕はゆっくり休んで。機会があればまた来週にでも行こう」

「うん……」

「それじゃ、暖かくしてな」

「うん……」

美裕の家に行ってやりたいと思うほど切ない声を出して。

「……大樹」

「ん？なんだい？」

「ごめんね……」

「えっ？なにが？」

「ううん……。なんでもない」

「そうか……。それならいいんだ」

「うん……。それじゃ……。ね」

「ああ。無理はしないでな」

「うん……。今日はほんとにごめんね大樹……」

「気にするなっ」

「うん……。ありがと」

「もう切るな」

「うん……」

「それじゃ、またな」

「……………大樹。うん」

がちゃ……………。

重い受話器を置いた。

「美裕……………」

美裕は具合が悪いつて言っていたけれど、元気がない。というより泣きそうな声をしていた。

やっぱり胡太郎と何かあったからなのだろうか。

くそつ。何かってなんだよ！

それも、胡太郎と話ができれば何かわかるはずだ。

俺は不安を胸に抱き、胡太郎が待つ公園へと向かった。

親友

ザ　　。

嫌になるほど雨が酷く降り続けている。

こんな激しい雨を今日に限って降らせることなんかないのに。最近はずっと雨らしい雨なんて降らなかったのに。なんで今日に限って……。

くそつ。

俺はなにを八つ当たりしているんだ。

夕べ来た道を小走りで抜けて、やがて公園に着いた。

公園の中に入り、昨日二人を見た辺りへと向かう。

理由はない。そこにいるような気がしたからだ。

しかし、やはり胡太郎はそこにいた。

雨の中にひとりぽつんと佇んで。

「よう……早かったな」

「胡太郎……」

胡太郎も傘をさし、元氣のない表情を俺に向けていた。こんな胡太郎の表情を見るのは初めてだ。

「すまないな。こんな雨の中、こんな所に呼び出してさ」

「そんなことはいい。それよりも話ってなんだよ」

「……」

「胡太郎？」

胡太郎は俯いて、傘で顔が見えなくなった。

「あ、ああ。すまないな。俺もなかなか話し出すのに苦労してな」

「どうしたんだよ」

「……あのさ」

しばらくして、胡太郎は俺に向く。

「なんだよ」

「あのさ、大樹。俺、お前に一つ謝らないといけない事がある」

「なんだよ。謝ることって」

「……」

押し黙って、いつもよく話をする胡太郎じゃないみたいだ。

「胡太郎……」

「……少し歩かないか？こんな雨だけどさ」

「おい……」

「な、頼む」

「……。わかったよ」

俺たちは何も言わず、公園を歩く。

懐かしい、昔胡太郎とよく遊んだ景色。そこを俺たちはゆっくりと横切っていく。

昨日、ここで絵を描いたらいい絵になると思った景色のところで、胡太郎が立ち止まった。

「じつはさ、俺……」

「……」

「俺も……。霧沢さんに惚れていたんだ」

「えっ？なんだって？」

「俺も、霧沢美裕っていう女の子のことが好きだった。それも、ずっと昔から……」

「どういうことだよ、それは」

「大樹。ここで俺たち、よく遊んだよな……」

「胡太郎」

「まあ、俺の話を訊いてくれよ」

「……」

「ここでさ。昔、俺とお前が出逢ったってことは覚えているか？」

「ああ。なんとなく」

「あのさ。どうして俺の家からこんなに遠いこの公園でお前と出逢ったと思う？」

「えっ？そんなことを言われても、俺にはわからない」

「そうだよな……。実は、さ、俺、お前と出会う前に、たまたまきていたこの公園である女の子を見つけたんだ」

「えっ？」

「その女の子は、いつもここで数人の男の子にいじめられていたんだ。その子はどうしてここに来るのかはわからなかったが、いじめられても毎日ここに来ていたんだ」

「俺はその女の子の事が気になり、ここまで毎日来ていたんだ。そして、俺はその子を見るたび、話し掛けてみようと思っただ。でも、そのときにいつも数人の男の子達が現れて、その子をいじめて、女の子は逃げるようにして公園からいなくなってしまうんだ」

「そんなことが続いていたある日、一人のいつもいじめている男の子とはちがう男の子が現れたんだ。そして、その男の子はいじめられている女の子を助けて。仲良くなっていった」

「それって……」

「その女の子を助けた男の子っていうのが大樹、お前だった」

「……」

「その日から、その女の子はいじめられなくなり、その変わりにその男の子とよく遊ぶのを目にするようになった」

「正直、俺は複雑だった。その子が楽しそうに笑顔でいる事が嬉しかった反面、あの時、俺が助ける事ができれば、あの子は俺とあんなふうに遊んでくれるんだって思ってた。今ならわかる。その気持ちは、あのときのお前に嫉妬と羨望の感情を抱いていたものだったとが」

「胡太郎……」

「そのうち、その女の子を見なくなってしまった。ただ、お前一人でぼつんとベンチに座っている姿を見るだけになった」

「……」

「そのとき、俺は思ったんだ。この男の子と仲良くしておけば、いつかあの女の子に出逢えるかもしれないと。そして、お前と……。大樹とここで遊ぶようになった」

「そんな……」

「すまないな。最初は本当に俺はそう思っていた。でも、お前といううちにあることを知ったんだ」

「あること？」

「お前がすごくいいやつだって事だよ」

「えっ……」

「そう思ったら、俺にあの時あの女の子を助けられなかったのは俺の所為だって。あの女の子が大樹と楽しそうに遊んでいたことも大樹がいいやつだからってことに気がついたんだ。あのときあの女の子を助けられなかった俺なんかが、あの女の子と仲良くなれるはずがなかったのさ」

「だから、俺は、全ての女の子に対して優しくしようと思った。女の子にかっこいい男の子だってことを示したかった。影で努力して勉強もして。もてる男を演出していたんだ。お前に負けたっていう負い目を糧として、いつか戻ってくるあの子が俺をみて、お前よりもいい人なんだって思ってた欲しくて」

「でも、それも……その女の子のことなんて、何年も経って、どうでもよくなっちゃった。大樹は、俺のライバルでもあったし、何でも話せる相手だった。大樹という事は俺にとってもすごく楽しかったんだ。なにしろ、大樹は俺のかけがえのない友人となっていたのだから」

「胡太郎……」

「でも、それも、突然霧沢さんが戻って来た事で、俺は当惑した。俺は本当は覚えていたんだ。成長しても、霧沢さんがあの子だって、

すぐにわかった」

「でも、霧沢さんは俺のことなんか知らない。それに大樹のことを見ているようだった。無理もない……」

「でも、日に日にお前達が仲良くしているのを見るうちに、あの時の嫌な気持ちが出てきてしまつて……。自分が嫌になつてきた」

「……いや。違うな。昔のそのことの所為じゃない。そうしたいつて思つてやつたんじゃない。でも……同じことを俺はしてしまったんだ」

「えっ？」

「大樹も知つているように、俺にはいつも言い寄つてきてくれる女の子がいる。でも、そいつらは大抵、俺の外見しか気に入らなくてな。本当の俺を見てくれなかった。俺の外見がいいとか頭がいいからとかで彼氏にすると箔がつくからとか、俺がもてているようだから自慢できるとかの目的で近づいてくるやつらばかりでさ。でも最初の頃から俺はこんなふうにな女の子にもてたいつて思つていたから、俺もいい気になつて、そんな女の子達を口説いてつきあつたりもした。でも……。だからかも知れないけれど、俺は本当に相手を好きになるつてことを知らなかつたんだよな」

「それを教えてくれたのが霧沢さんだった。霧沢さんは大樹に好意を寄せている、それも本当の好意を。いつも俺を見ている女の子達とは違う感情をいつも大樹に与えていた。だから、俺はそんな霧沢さんに惹かれた。お前をうらやましく思つた。俺も、霧沢さんのような女の子に好かれてみたいつて。お前のように霧沢さんに愛されてみたいつて」

「大樹があんなに不幸な目に会つて。それでもようやく楽しそうに

なってきたっていうのに、その大樹を楽しそうにしてくれたのが霧沢さんだっことをわかっていても、俺のこの気持ちだけはどうしてもなかった……。ははっ。いつも女の子とよろしくやっている俺がだぜ」

「だから、昔を思い出したことを理由に昨日……霧沢さんをここに呼び出したんだ」

「呼び出して……。今大樹に言ったことを伝えた。そして、霧沢さんのことを好きだっと言った。霧沢さんがお前のことを想っているって事を知っていても、言わずにはいらなかった」

「それで……。彼女はなんていったと思う？」

美裕なら……。

「……。大樹。俺に、霧沢さんに何も言わないのかよ」

昨日美裕に胡太郎が言っていた情景を思い出す。
いや、見なくてもわかる。

美裕なら、胡太郎が美裕のことを想っているって事を知っても、心を痛めても断るだろうと。

俺ももし、他の女の子にこんなふうに好意を打ち明けられても、絶対そうするのだから。

「くそっ……。お前ら、本当にうらやましいぜ。俺が霧沢さんにこんな事を言っても、お前は霧沢さんが俺にそんな気持ちを向けないってことを信じているんだな……」

「胡太郎……」

「わかってるさ。謝りたいのはそのことなんだ。すまなかった。俺、親友のお前が愛した女性に横恋慕して……。彼女を、お前を傷

つけてしまった。本当にすまない……」

「胡太郎……。俺さ、昨日の夜、お前が美裕と何か話していたことは知っていたよ」

「えっ……」

「昨日、たまたま……通りかかって。そうか、そういうことだったんだな」

「そうか……。おまえ、ここに来ていたんだな。それでも、俺たちの間に入ってこなかったなんて。お前……」

「すまなかった……」

「胡太郎……」

「大樹は俺たちのことを本当に信頼してしてくれたんだ……。本当にすまない。大樹。俺を殴ってくれ。俺はお前のそんな気持ちを考えずに自分だけのことを考えてこんな事をした」

「胡太郎……。俺がお前にそんなことできるはずないだろう？」

「大樹……」

「誰かを好きになるってのは自分じゃコントロールできないものだろ？ 誰にも責められるものじゃない。別に胡太郎が美裕のことを好きになっても、それは仕方がないさ。だって、美裕はあんなにかわいいし、美人だものな。性格も優しいし、尽くしてくれる。ああ、でもだからって、もう手を出すのは止めてくれよ。胡太郎が相手だと美裕がいつ俺を捨ててしまうかわからない」

「くっ……。あははは……。こいつめ、のろけやがって」

「えっ？ のろけだったか？」

「大樹……。やっぱり俺はお前には勝てないな」

「そんなことはない。胡太郎もいいヤツじゃないか。俺が一年前、あんなことになっても、気を使って、いつもの毎日を過ごさせてくれた。そのおかげで俺はどんなに助かった事か……。胡太郎は俺の親友だよ。本当に」

「大樹……」

「なんだよ、胡太郎」

「俺……、お前の親友でいいのか？」

「って、胡太郎が友人でなくなったら俺に友達と言える人ががいなくなる」

「くっ……あはははは。そうだな。俺もだ」

「だろ？」

「大樹……。すまなかったな」

「ああ。だからもうそのことはいいよ」

「ありがとう……。大樹」

「ああ。でもその前に胡太郎。一つだけ訊きたい」

「……ああ」

「どうして、お前がそんなことを今言うようになったんだ？ どうして、わざわざ仲良くなった俺たちの間に入ろうとしたんだ？ いつものお前なら、そんなことを考えてもしなかったはずじゃないか。いつもの胡太郎なら……。冗談で済ますような話じゃないのか？ それをわざわざ俺たちに嫌われるような事をして……。どうしちゃったんだよ？ 一体」

「……」

「胡太郎？」

「……すまない、大樹」

「どうしたんだよ」

「俺……。やっぱりお前には隠し事が出来なかった」

「胡太郎？ どうしたんだよ」

「俺……。俺さ、今月末で転校する事になってしまったんだ」

「えっ？ なんだって？！ なんでそんなことを早くに……」

「すまないな。俺も知らされたのは昨日なんだ」

「昨日……」

「だから……。この気持ちのしこりを残したくなくて。いや、あの時に霧沢さんを助けられなかった俺の弱みを霧沢さんに晴らして欲しくて……。断られる事を願って……。そして、お前達に嫌われよう

と思って……。大樹にはもう別れるっていう辛い思いをさせたくなかったから……」

「胡太郎……」

「いや、すまなかった。こんなことで、俺は霧沢さんにも辛い思いをさせた。お前から俺が謝っていたと、言っておいてくれ」

「そんなことはいい。本当におまえ、転校してしまうのか？」

「ああ……。本当だ」

「そんな」

「大丈夫だ。俺も大樹とは親友だ。機会があればいつでも逢えるさ」
「そうだな。そうだよな」

「ああ……」

ザ。

雨が降っている。

今まで雨の音を忘れていた。

気が重い雨も、少し気を使ってくれていたのだろうか。

「……それじゃ、大樹。俺はこれで帰るよ」

「胡太郎……。なあ、これからどこに行かないか？昔の……いつものように」

「ばかを言え。俺は霧沢さんに辛くしてしまったんだ。お前のことを想う霧沢さんの気持ちを踏みにじるようなな。霧沢さんは優しい。俺の気持ちをよく知って考えてくれている。だから彼女、だいぶ思いつめているはずだ。俺のこととお前の事で。その為にお前はこれから霧沢さんに逢って、話をしないとダメだからな。そうでないと、もう俺は霧沢さんに顔を合わせられない」

「胡太郎……」

「なんだよ、不肖の弟子。俺とどこかに遊びに行くっていうのなら、少なくとも大樹が霧沢さんを抱いてからでないとナ」

「胡太郎！」

「ははははは。冗談だよ。お前らはもう誰かが何かを言っても壊れ

ない絆なんだから。俺が言っただ。間違いないさ」

「胡太郎……」

「俺が言えた義理じゃないんだが……。霧沢さんを幸せにしてやるんだぞ。俺の分までもナ。彼女、お前と同じなんだから」

「……」

胡太郎も、知っていたのか……。

「本当にお前ら……。いや、もういい。さあ、早くいけよ」

「胡太郎……」

「すまん、親友。俺、不器用で」

「胡太郎……」

「また明日、学校でナ」

「ああ！また明日、胡太郎」

ぐつと親指を伸ばし、俺に合図した胡太郎。

俺も、胡太郎と同じ事をして……。公園を出た。

赤い傘

雨の中。

俺は一人で街を走る。

見慣れた景色。

この街並みと、ずっと胡太郎と遊んできた。

でも、もう、これからはあいつとは一緒にいられなくなる。
でも。

胡太郎とは親友だ。

そんなことで今生の別れになるなんてこともない。
それよりも。

今、美裕に出会って、そのことを伝えなければ、また胡太郎と交えたこの3人で仲良くやっては行けなくなる。

そうお前は言いたかったんだよな、胡太郎。

俺の家の前に着く。

そこに……。

美裕がいた。

赤い傘をさして、俺の家の門に寄りかかるようにして佇んでいる
美裕。

美裕もきつとわかっていたんだ。

だから、ここで、俺を待っていたのだろう……。

「美裕」

「……大樹」

美裕は俺に緑の瞳を向けて。

「俺、胡太郎に会ってきたよ」

「吾妻君に……」

「胡太郎、美裕に謝っておいてくれって」

「吾妻君……」

「それでさ。胡太郎、今月で転校になるんだって」

「えっ……？」

「それで……美裕に昨日あんな話をしたんだってさ」

「……」

「美裕ももてだな」

「ばか……」

「なあ、美裕。俺より胡太郎がよかったら、美裕は胡太郎を好きになってもいいんだぞ。胡太郎は俺なんかよりよっぽどかっこいいし、女の子には優しいだろ？」

「大樹。わたしは大樹が好き。誰に好かれようとも、他の人に優しくされても、わたし、大樹の事だけを想ってる」

「美裕……」

「吾妻君はいい人だけど、わたしの好きな人は大樹しかないから。だから、わたし、吾妻君に断つたの……」

美裕に、こんなにまで。俺は……。

「それとも、大樹は、大樹はわたしのこと嫌なの……？」

「そんなばかな事があるか。俺は美裕のことをが好きだ。本当に愛している。親友の胡太郎でも美裕に酷い事をしたら、なにをしてもうかわからないくらいに。ただ……。美裕が幸せになるっていうのなら、俺じゃなくてもいいって……思っただけなんだ」

「大樹は……。わたしのこと、幸せにしてくれないの？」

「俺でよかったら、美裕が俺でよかったら、死ぬ気で一生美裕を幸せにしたい」

「本当？」

「当たり前だ。俺にはもう美裕がいないと、生きている甲斐がない」

「大樹、わたしも、そう。わたしも大樹といっしょにいないと、わたしじゃなくなっちゃうから……」

「美裕……」

「でも、ごめんね、大樹……。わたし、ほんのちょっとだけ、吾妻君の気持ちもわかって……」

「ああ。俺もわかる。この美裕のことが好きだっていう気持ちを、

あきらめないといけないっていうのは、辛いものな」

「……」

「本当は、胡太郎、美裕に昨日そう話して、自分のわだかまりみたいなものを溶かそうって思ってたんだって。昔の美裕への負い目無くしたくて、そう言ったんだって」

「吾妻君……」

「だからさ。もう大丈夫だよ。胡太郎は優しいやつだし。また明日学校ではいつものように馬鹿な事を言ってくるさ。だから、もう、胡太郎のことは大丈夫だ。そうするあいつの気持ちも、わかって欲しい」

「本当？」

「ああ、本当だ。俺たちは親友だからな。よくわかるさ」

「くすつ……。そうだよな」

「だからさ。俺。胡太郎の分まで美裕を幸せにさせてくれないか？ 実は、胡太郎にもそう頼まれた。そうすれば胡太郎も俺たちのことを認めてくれるさ」

「本当？」

「ああ。美裕がいやだって言うまでな」

「くすつ。それじゃ、本当に一生だね」

「そうか」

「あ。でも」

「ん？」

「大樹も幸せじゃないと、わたしは幸せになれないよ」

「大丈夫だ。俺は美裕がそばにいてくれれば、ずっと幸せになれる」

「本当？」

「ああ。絶対」

「うん……。絶対」

俺を見つめてくれる美裕の緑色の優しい瞳。

その美裕の唇に、俺の唇を触れさす。

冷たい雨の中。

それでも美裕は暖かった。

「なあ、美裕」

「なに……」

「俺の家に入らないか？こんな雨の中だ。家で色々話したい」

「……いいの？」

「彼女を自分の家に入れない彼氏があるか」

「くすつ……。そうだね」

「あ、それじゃ、ちよつとまってて」

「ん？どうしたんだ？」

「お昼ね、大樹に作ってあげようと思って。本当は昨日から材料を用意していたんだ。それを取ってくる。お弁当じゃなくなっちゃったけど、大樹に料理を作ってあげたいから」

「そうか？それは嬉しいな。喜んでお願いしたいよ」

「くすつ。うん。それじゃ、ちよつとまっていてね」

今日出かけることはかなわなかったけれど、いろいろあったけれど、これで、きっとこれからもいつもと同じ毎日が過ごせる。

よかった。本当に。

美裕が傘をさし、家へと戻っていく。

美裕の家の前にあるその先の交差点。

あそこは日曜日になると車通りが激しくなる。

そんな為、なんとなく今一瞬不安になった。

「あ、美裕、気をつけて……」

美裕に声をかける。

「えっ？大樹、何か言った？」

美裕が振り向く。

その時だった。

空気を切り裂くような高い音があたりに響く。

車の急ブレーキをかけたような音だ。

トラックがこっちに曲がってきた。

いや違う。曲がってきたんじゃない。

雨で濡れた道にタイヤを滑らせている。

車体を斜めに傾きかけ、すごい勢いで滑ってくる。

そして、そのトラックは俺たちの方へと突っ込んできた。

「きゃっ！」

美裕がトラックに驚き、立ちすくむ。

ちよつと、待て！

いや、考えている暇はない！

美裕はまだ俺の近くにいます。

俺は飛び出して美裕に飛びつく。

「美裕っ！」

「えっ！」

俺は美裕を後ろから抱きかかえて、トラックの迫る横へと飛んだ。

「きゃっ！」

美裕の持っていた赤い傘が飛ぶ。

美裕の体を両手でかばいながら倒れ込む。

倒れ込んだそこには小さな街路樹が植えてあった。

俺はその街路樹に頭を突っ込んだ。

鉄と石のぶつかるような大きな音がして、何か色んな破片が俺たちに降り注ぐ感じがした。

俺たちのギリギリ後ろでトラックが通過し、俺の隣の家飛び込んだようだ。

「美裕！みひろっ！」

「大樹……」

俺の胸の辺りで美裕の声がした。

「美裕、大丈夫か！？」

「うん……、びっくりしたけど、わたしはなんともないよ……」

「よかった……」

「大樹……。ありがとう」

「ああ、びっくりしたよな……」

俺から美裕が離れる。

「た、大樹！」

「えっ？」

「大樹、怪我してない?!」

「えっ? 美裕? ……どこだ？」

気が付くと……。あたりは暗闇だった。

顔に手を当ててみると、ぬるっとする。

「大樹！」

「美裕……。あれ？」

美裕が見られない。

手に纏わりつくぬるぬるするこれは、なんだ?

雨じゃない。なんだかすごく生暖かいもの……。

「大樹……大樹！」

「えっ? ……」

そういえば、なんだか顔が、頭がすごく痛い……。

俺はどうなってしまったんだ?

「み、美裕……おれ……」

「たいき、たいき! たいきっ!!」

「み、ひろ……」

息ができないほど強烈な痛み。

痛みを感じたら、くらっと眩暈が襲ってきて、自分がなんだかわ

からなくなっていく。

俺は、立っているのか倒れているのか。

グルグルと体が回って、下へ下へと落ちていくような感じがして。

「たいき、たいき……」

美裕の声が、だんだん小さくなっていく……。

俺はそのまま、気を失った。

霧沢美裕

それから、どのくらいの時間が経ったのかよく憶えていない。
気がついてても、暗闇だった。

ちゃんと目が覚めているのに、目が開かない。

俺の目に手を当ててみると、何か布のようなものが巻かれていた。

「あれ……。俺、どうしたんだ？」

あたりを探ると、体の下にはやわらかい感触がある。

どうやら蒲団の上に寝かされていたようだ。

手探りであたりを確かめながら半身を起こす。

辺りがどうなっているのか確かめたいが、顔に巻かれた布が邪魔で何にも見えない。

ここは何処なのか。

俺はどうなっているのか。

しばし、俺の今までのことを思い出してみる。

昨日の晩、美裕と胡太郎が公園で話しているのを見て。

次の日の朝、胡太郎から美裕が好きだったって事を聞いて。そうしたのは胡太郎が転校してしまうからだって言う事を聞いて。

そのあと、俺は美裕と逢って、胡太郎のことを話して……。

えっと、それから、美裕が料理を作ってくれるって言うって……。

「あつ！」

そういえば、俺、さっき突っ込んできたトラックをよけようとして、美裕を。

「美裕、美裕は大丈夫なのか？」

美裕を助けようとしたんだけど、その美裕は大丈夫なのだろうか？ そのあたりの記憶からない。

くそう。この布がすごくいまいましい。

美裕を見られないじゃないか。

でも、ここでじたばたしてもどうにもならないし、無理をするのも少しはばかる。

目が見えないのなら、ちょっと耳を済ませてみよう。

遠くの方で、かすかな喧騒が聞こえる。

そして、かすかな消毒薬の匂いがした。

そうか、きつとここは病院なんだ。

この目に巻かれた布のようなものはきつと包帯かなにかなんだろう。

あれから俺が包帯を巻かれているあたりに怪我した所為でここに運ばれたに違いない。

それから、俺が今何か独り言を言っても誰も答えなかったから、きつとここは個室なのだろう。

コンコン。

そのとき、俺がいる右の奥からなにかを叩く音がした。

扉を叩くような音。

誰か、来たのだろうか。

「はい」

がちゃ。

「失礼します……。あ。森村さん、お目覚めですか？」

「えつと……。どちら様ですか？」

「はい。私はこの病院の看護師です」

年配の女性の声だ。

「看護師さん……。つてことはやっぱりここは病院なんですか？」

「ええ。森村さん、先日の事故で目を怪我されてしまって、こちらに運ばせていただきました。ご気分はどうですか？」

「あ、看護師さん。美裕は、あ、俺と一緒にいたと思う女の子なんですけど、美裕は、美裕は大丈夫なんですか？」

俺のことはどうでもいい。ただ美裕のことが心配だ。

「みひろさん？ 女の子？ ああ、あなたを連れてきたあの子ね。

ええ。大丈夫よ。一応検査は受けたみたいだけど、怪我はなかった

みたい」

「本当に？」

「はい。でも、森村さん……」

「よかった……。美裕が無事で……」

看護師さんが言うんだ、多分、間違いないだろう。
全身から安堵の息が漏れる。

「森村さん……？」

「あ、そうだ。あの、俺、どうなったんですか？」
安心したら、俺の怪我のことが気になった。

早く無事な美裕を見たい。

「……」

看護師さんのため息のような音が聞こえる。

「看護師さん？」

「え、ええ、ごめんなさいね。今担当の先生を呼びますから」
「え？はい」

美裕が無事なら、俺はそれでいい。良かったと思った。

しかし、それから医師の話を聞いたとき、俺は愕然としてしまった。

「それは、どういう、ことなのですか？」

「つまり……。細かい木の枝やとげ等が眼球にたくさん刺さって横に流れた為、あなたの両目にある水晶体が壊れてしまったのです。

その為、虹彩が傷つき、網膜が破壊され、眼球としましては……」

「あの、俺の目はどうなるのですか？また、見えるようになるのですか？」

そんな複雑な専門用語なんてどうでもいい。結論だけ言って欲しい。

「……」

先生のため息が聞こえる。話したくないという意味が伝わって来るようだった。

「……あの、はっきり言って下さっていいです。俺には両親とかの家族がいませんから」

「……。あなたの両目は……、残念ですが、もう見えるようにはありません。角膜の問題でもないですから、移植も無理です。失明状態となります」

「見えなくなる……」

「はい。他の怪我はたいしたことはなかったのですが……」

「そうですか……」

「とりあえずは怪我が良くなるまでここにいてもらいます。そのあとのケアなどはまたお話します」

「はい……」

その言葉を聞いても、なんだか現実感が無かった。

だって、この怪我の痛みはもうさほど感じない。このわずらわしい包帯が取ればまた今までのように見えるような気がして、これからずっとこの闇の世界なんて信じられなかった。

俺はあのとき、車をよけようとして美裕を抱きかかえたため、繁みに頭から突っ込んでしまった。

そこにあつた木の枝が、俺の両目に刺さり、俺の両目がつぶされて、失明してしまったのだという。

顔や他のところにそれほどたいした怪我が無かったのに、どうして眼だけに……。

これから、俺は何も見えなくなってしまうのか……。

これから絵を描くことができなくなってしまうのか。

いや、そんなことどうでもいい。

一番嫌なのは、これから……。

あの美裕を見ることが出来なくなってしまったこと。

美裕……。

あの緑の瞳で俺を優しく見つめる美裕。

あの輝く笑顔で俺に話してくれる美裕。

その美裕が……見られないなんて。

「俺……。みんななくしてしまったのか……」

ずつとずつとこの暗闇が続いていくというのか。

怒りたくても怒る相手がいない。

文句を言いたくても、何が言いたいかわからない。

あの時と、同じなのか……。

両親がいなくなってしまうことを実感した、あの嫌な気持ち。

あのとき、もう失うものなんてなにも無いと思っていたのに。

でも今、またあの時のように、突然失ってしまったなんて。

「……。嘘なんだろう……」

もうなんでもどうでもよくなってくる。

胡太郎と遊んだこと。

絵を描いていたこと。

美裕を幸せにするんだって約束したこと。

そして、これからのこと。

なにもかもが、嫌になってくる。

「嫌だよ……。嫌だよ。みんな……。なくなってしまうのは、嫌だよ……。こんな暗闇の中で、一人きりにしないでくれ。俺ひとりだけにしないでくれ。父さん、母さん、美裕……。どうして、どうして、俺……。どうして……。こんなことになってしまったんだよ……。せつかく……。せつかくこれから俺の大好きな美裕とずっといっしょにいられると思ったのに……。なんでだよ……」

いつしか、声を出していた。

今まで我慢してきた。

両親が亡くなっても。

一人きりになっても。

俺は、何とかやっていけると思って、辛さを飲み込んできたのに。それも……。みんな、無駄だったのか……。

「ははっ……」

そうか……。そうだ。

無駄だったんだ。

だったら、もう、いいんだ。

もう、なんでもいい。

もう何にも考えたくない。

これからこのまま、生きて……いたくない。

もう、いいんだ……。

しばらく、一人放心していた。

遠くで何か音がしている。

でも、俺にはそんな喧騒なんて、もう関係ないことだ。

何か外で起こっていても、俺には暗闇しか見ることが出来ないのだから。

眠ろう……。

このまま眠って、ずっと目が覚めることがなかったら、楽なのに。こんな暗闇なんだから、おんなじことだ。

でも。

俺がここでいなくなったら、美裕、悲しむかな。

美裕……。どうしているかな。

怪我が無かった、って聞いたから大丈夫だよな。

助けたんだから、絶対、幸せになれよな。

俺が美裕と約束したのに、出来そうになくって、ごめんな。

美裕……。

いや、もう、いいんだよ。

美裕……。

美裕の、俺に向けてくれるかわいい笑顔が暗闇の中に浮かぶ。なんだろう。この気持ちは。

俺、また、なにかにすがりたいって、思ってる。

あの時と同じように、まだこの世界にいたい。

その、すがりたいっていう存在があるから、まだいたい。

例え、世界の全てを失ってしまっても、その人がいるから、まだここにいたい。

そのすがりたいって、思う人が……。

「大樹……」

ふと、声が聞こえた。

柔らかく、やさしい、女の子の声。

この声だけは、忘れる事はない。

「……美裕？」

「うん……」

いつのまにか、俺の部屋に美裕がいたらしい。

静かな部屋に、美裕の息づかい、美裕の匂い。美裕の着ている服の擦れる音がかすかに聞こえる。

美裕がここにいるって、暗闇の中でも感じられた。

なんだか、嬉しかった。

「美裕。大丈夫だったんだってな。よかったよ。彼氏としては彼女を助けられなくて、怪我なんてさせたらかつこ悪いもんな」

「……大樹」

いつもの美裕の声より張りが無い。かすれた、小さな声。

この声は……。

「なんだよ、泣きそうな声をしてさ。まあ、俺、怪我しちゃったけど、美裕のせいじゃないからな。俺が勝手にこけただけだから。気にしたら俺、怒るぞ」

「大樹……」

「な、ほら、そんな声を出すのはやめろ。せつかく助けたのにそんな声を出しては助けた甲斐がない」

「大樹、大樹……」

「だから、そんな声、だすなって……。美裕？」

俺の身体が、暖かいものに包まれた。

女の子の……。美裕のいい香りがする。

「美裕？」

「大樹……。そんなに、一人で辛くなろうとしないで……」

俺の背中に回された美裕の手が、ぎゅっと俺を抱きしめる。

「俺……。辛くなんて、な……」

突然、俺の口が何か柔らかいもので塞がれた。

「み、美裕……」

「我慢、しないでよ……。わたしがここにいるからって……」

「美裕……」

「大樹、辛かったらわたしに何でも言ってよ。一人でそんなふうに関じ込めようとししないでよ！大樹が辛そうにしているの見るの、すごく嫌だよ！」

「美裕……」

「大樹……大樹が辛そうにしているの、聞いちゃった」

「美裕……」

「それなのに、わたしがいることを知って、こんな優しいこと言っ
て……。ほんと、馬鹿だよ、大樹……」

「聞かれちゃったか……。かつこ悪いな、俺」

「……。大樹……ごめんね……。わたしのせいで目が」

「だから、美裕は悪くないんだって。これは俺のドジでしたことだから」

「大樹……」

「でも可らしいよな。これから生活に支障がでるとか、絵が描けなくなるなんてこととかより、美裕を見ることが出来なくなるってことを知って、俺、死にたい気持ちになったよ。こんなにかっこわるい俺のことをこんなにも想ってくれる美裕に、これから俺は何にもできそうにないんだもん……」

「大樹、大樹……」

「だから、美裕。お前は俺のことをそんなに思ってくれることはないんだぞ。うれしいけどさ。そうしてくれる美裕に俺はこれから何にもこたえてあげることができないんだから」

「わたし、わたし……」

頬にあたる彼女の髪の毛からいいにおいがしてくる……。

俺の胸に顔をうずめているようだ。

「美裕？」

「あのね、大樹……。わたしの話を訊いて」

「美裕……」

「わたしがね……。このお母さんの実家の家に戻ってきたのは、お父さんが病気で亡くなってしまったからなの」

「ううん……。たぶん、大樹は気がついていたんだよね。わたしに両親がいなくてことを。わたしがわたしにお父さんがいないってことをそれとなく言っても、大樹は訊いたりしなかった」

「そうしたら、もしかして大樹も、わたしと同じなんじゃないかなって思ってた……。そして同じ辛さを知っているんだってことを知ってた。でも大樹はそんなことをわたしにわからないように毎日振舞っていた」

「ああ」

「大樹はいつもわたしのした事に喜んでくれて。大樹もわたしにすごく優しくしてくれて。だからね、わたし、大樹といっしょにいるときは、そんな辛さを考えないようにすることが出来たの。そしてわたしのこれからの生きがいが出来たって、思えたんだ」

「生きがい？」

「うん。大樹といっしょにいて。大樹がわたしのすることに喜んでくれること」

「美裕……」

「わたし……。大樹と出会えていなかったら、きっと辛くて逃げたかもしれない。本当は、お父さんがいなくなったとき、もうなにもかも嫌になって……。自殺していたかもしれない」

「美裕……」

「でも、最後に、この街に戻ってきて、お母さんとお父さんのことを考えてからにしようと思ったの。そんなとき……。あなたと、大

樹と出会えた」

「だからね。大樹は、わたしの恩人なんだよ。それも、今度で2回目……」

「だから……、大樹。そんなふうに自分だけ辛くなるうとしないで。わたしにもその辛さを分けて。わたし、今度は大樹ことを助けたいの！もつと大樹を受け止めたいの！……わたし、大樹と、いっしょにいたい……」

「美裕……」

「だから……大樹。そんな辛いこと言わないで……わたしに、なんでも言つてよ……」

「……美裕。……美裕は今、ここにいるんだよな」

「うん。わたし、大樹のそばにいるよ。大樹を抱きしめてる」

「ああ。俺も美裕の身体を感じる……。暖かい美裕を感じる……」

「うん……」

「美裕……。俺、一つだけお願いをしていいかな……」

「うん……」

「もう一度、美裕の綺麗な瞳を見てみたいな……」

「ぐすつ……。大樹……。それじゃ、わたしが……。あなたの瞳になつてあげる……」

「俺の、瞳？」

「わたしがずっとあなたのそばにいて、あなたの瞳になつてあげるから……」

「美裕……」

「だから大樹……。わたしを……感じて」

再び、俺の唇に柔らかいものが触れる。

美裕の、唇……。

俺は美裕の頭を抱きしめてみた。

柔らかい髪。暖かな体。

美裕は、ここにいて……。

「美裕……」

「大樹……」

唇が離れた。でも、そばに美裕の吐息を感じる。きつと、美裕は今、俺の目の前で、俺を見つめてくれているのだろう。

あの吸い込まれそうな緑色の綺麗な瞳で……。

暗闇の中に……美裕の顔が見えたような気がした。

「美裕……。ありがとう。俺、今美裕の顔が見えたような気がした」

「大樹……。もっと、わたしを感じて……。そして、わたしをみて」

「美裕……」

すると、布の擦れる音が聞こえる。

「ほら……。わたしの暖かさを感じて……」

美裕の体が、俺の体にそっとくっついてきた。

「ねえ……。わたしの音……聞こえる？」

とくん、とくん、とくん……。

美裕の柔らかい体から鼓動が聞こえていた。

「美裕……」

そこにいて美裕の体を抱きしめる。

「うん……。大樹。あなたの音も聞こえるよ」

美裕はベッドに半身を起こしている俺をまたぐように立ちひざでいたみたいだった。

美裕は……。

きつと、今、美裕はものすごく綺麗なんだろうな。

こんな美裕が、俺のことを本当に心から想ってくれている。

俺……。

「美裕……。俺、美裕に甘えて……。美裕を貰って、いいのか？」

「わたしは、大樹の瞳だから……。大樹の為ならなんでもしてあげるから……」

「美裕……。ありがとう」

「うん……」

「わたし、女の子で……よかった。大樹を愛していられるんだもの」

「美裕……。ありがとう。俺も美裕のこと、大好きだ。愛している」

「大樹……。うん」

「美裕……」

「んっ……」

俺には美裕がいる。

例えば俺が光を失って、全てを見ることができなくなっても、美裕がいてくれるだけで、これからも生きていけると思う。

だって、それが俺たちのこれからの幸せになるのだから。

それぞれの未来

最初は怖かった。

前を歩くときも、前に何かあるんじゃないかって。
ぶつかって、躓いて、転んでしまうんじゃないかって。

見えないことに嫌気が差して荒れてしまったこともあった。

でも、いつも俺のそばには美裕がいてくれた。

俺を助けてくれた。

俺を励ましてくれた。

甘えさせてくれた。

たくさん、たくさん優しさをもらえた。

何もない俺に。

弱い俺に。

いつもずっとそばにいてくれた。

そして、いつも。ずっと。ずっと……。

俺に愛を注いでくれていた。

「それじゃ、これは？」

「えっと、私は……あなたを……、愛しています」

「はい、よくできました。それじゃ、ご褒美」

美裕の柔らかな唇が俺の唇に触れる。

「ん。美裕……。でもこんな恥ずかしい文章はもう勘弁してよ」

「くすつ。それじゃ、今度はこれ」

「ん、えっと……。私も、あなたを、愛しています。って、美裕」

「うん。これはわたしから。はい、ご褒美。んっ」

「もう、美裕……。恥ずかしいって」

「くすつ。でも大樹はすごいね。もう点字もこんなにすらすら読めるようになって」

「なんの。美裕が色々教えてくれるし、ご褒美もあるから」

「くすつ。もう、大樹は」

俺の目が見えなくなって、もう数年が過ぎていた。

俺は美裕の姿を見ることはできなくなってしまったけれど。

俺のそばには、大好きな美裕がいてくれる。

美裕の姿を見られないことなんて、それはもう俺にとって、些細な不満にしか過ぎない。

美裕が俺に優しくしてくれて。

俺のことだけを見てくれて。

俺が声をかければ、そこに必ず美裕がいる。

大好きな、美裕が。

でも、いつもこうして、俺に尽くしてくれる美裕に、何もしてあげられないことが、とても切なかった。

「なあ、美裕」

「なに？」

「俺、いつも思っただけどさ、いつも俺のためにこうして尽くしてくれて。美裕は大変じゃないのか？」

「大丈夫だよ」

「でも。俺。美裕に何もしてやれなくて。いつも苦勞させてしまっ

て……。好きな女の子に俺もいろんなことしてあげたい。男として、愛している女の子を幸せにさせてあげたいんだ。色々出かけたり。買い物したり。映画を見に行ったり……。女の子が喜ぶことをさせてあげたい」

「……ねえ、大樹。約束したこと、憶えてる？」

「約束？」

「うん。大樹はわたしに約束してくれたもの」

「どんな？」

「大樹はわたしを幸せにしてくれるって」

「でも」

「わたしはいま、幸せだよ。だって……」

「大樹は、わたしを、心から見てくれてる。想ってくれてる。こうして、すつごく大事にしてくれてる。大好きな人が、わたしを、本当に心から想ってくれてる。それが幸せでないなんてことは、絶対無いんだよ」

「美裕……」

「だから、わたし。ほんとうに、すつごく幸せだよ」

「そして、大樹。私を幸せにしてくれて、ありがとう」

言葉が、出てこない。

ただ見えない瞳から、涙が出てきていた。

「……ねえ、大樹。今日はあの公園に行ってみない？」

「公園？」

「今日はね、雪が降っているんだよ」

「へえ……。雪か。もう冬になっていたんだな」

「うん。今ふとね、あのとき、二人で行けなかったから、行きたいなって、ちよっと思っただの」

「そうだな……」

「それでね、わたし、あの絵のマフラーと帽子をしていくね」

「えっ？」

「あの公園はね、わたしのお父さんがあの絵を描いたところなの。あの公園は、今のような雪の降る日に、わたしのお母さんと出会った場所だからって。それで、わたし、大樹に会う前に、あの公園に毎日行っていたんだよ」

「そうだったのか……」

「それでね、このマフラーと帽子はお母さんのものだったらしいの。それをつけて、大樹といっしょに歩きたい」

「美裕……」

「だめ、かな……」

昔見た、あの絵を思いだす。

心に残った情景が、思い浮かぶ。

「きっと、美裕はあの絵に負けないほど綺麗なんだろうな」

「大樹……」

「よし、行こう。見えなくても、俺には心の瞳がある！そんな綺麗な美裕なら、心でも見える！」

「くすっ……。大樹……。うん」

「それじゃ、美裕、行こう」

「うん。それじゃ、ちよっと待っていてね。用意してくる」
「おう」

あの公園か……。

そういえば胡太郎、今どうしているかな。

何度か見舞いに来てくれたけど、胡太郎も俺の目が見えなくなっ
てしまったのは俺の所為だといって、何度も謝っていたっけ……。

俺が退院する頃には胡太郎はもう引越してしまった後だった。
あれから俺は学校を辞めざるを得なくなり、美裕もあれからずっ
と俺のそばにいてくれている。俺たちは何にも変わっちゃいない。
だから、胡太郎、手紙の一つでもよこせばいいのに。ひやかして
もいいからさ。

「まったく、胡太郎のやつ……」

そう独り言を呟いていたら、たたたた……と、美裕がかけてく
る音が聞こえてきた。

「大樹！大樹！」

「えっ？どうしたんだ、美裕」

「吾妻君から、吾妻君から手紙が！」

「えっ？」

「それが、吾妻君……」

「美裕、おちついて」

「う、うん……」

「手紙はなんて書かれていたんだ？」

「あのね、それがね……」

エピソード

「くすつ。大樹のサングラス姿もだいぶさまになって来たね」

「そうか？俺かっこいいか？」

「うん。すごくかっこいいよ」

「そうか。そうか」

「くすつ。大樹、かわいい」

「……美裕は今どんな格好かな」

「わたし？」

「ああ」

「あのときしようって言ってたあのマフラーと帽子をしているよ」

「えっ？」

「わたしもだいぶ髪の毛が長くなってきたし……、もうちょっとだけ若かったらあの絵と同じになるよ」

「あはは。美裕はまだ全然若いじゃないか」

「でも、もうわたし学生じゃないし……」

「そうか。もうあれからだいぶ経つものな」

「うん。でも、大樹がわたしを見られるようになれば、きっとこの姿を見たいなって言うと思ったから、恥ずかしいけれど、このかつこ」

「そうか……。俺、やっと、また美裕を見られるのかもしれないんだよな」

「うん」

「あはは。それにしても、胡太郎はやっぱすごいやつだったな」

「うん……」

「美裕、心配なのか？」

「ううん……。大樹の目が治れば、すごく嬉しいな……って、思ってた」

「美裕にも色々世話になったもんな」

「ううん……」

「目が治ったら、俺、美裕に何かしてあげるからな。今までずっと俺に優しくしてくれた分、何倍もにして」

「うん……」

「それと……。俺、思う存分美裕を見るから、覚悟しておいてな」

「くすっ……。うん」

「そして……」

「そして？」

「また、俺、美裕を描きたい。あの絵に負けないほどの、あの姿をした、大好きな美裕を」

「くすっ……。うん。がんばってね！」

「ああ！」

『森村夫妻へ』

久しぶり。元気だろうか。

いや、元気だな。結婚して毎日ラブラブな夫婦をしている二人だものな。

つと、こんな冷やかしをしようと思って、こんなに久しぶりな連絡をしたわけじゃないんだ。

いままでに色々手紙を送ってくれて、返事が出せずに申し訳ない。いろいろやっていて、手紙を出す余裕が出来なかったんだ。許して欲しい。

それで、突然だけど、俺、医師になった。

それで、俺、最近失明治療の画期的な方法をあみ出せた。それで、大樹。お前の目も治せるかもしれないんだ。

いや、大樹の目を俺に治させて欲しい。

俺はあれからずっと勉強して、いまようやくお前達に恩を返せる時がきたんだ。

だから、是非、俺のいる病院に来て欲しい。

そして、親友。また昔のようにたくさん話をしようじゃないか。

おもいつきり冷やかしてやりたいしな。

なんてな。でも、いつでも来てくれよ。いや、早い方がいいな。手紙を届いたらすぐにだ。

それじゃ、久しぶりの再会を祈って。

『吾妻胡太郎』

Fin.

エピローグ（後書き）

心の情景を最後まで読んで頂きまして、本当にありがとうございました。

もしよろしければ、評価、感想、意見、指摘などよろしくお願いいたします。

この小説から、どのようなことを思っ頂けたかと気にしています。頂けたら、すごく幸せです。どうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0112f/>

心の情景

2010年10月8日14時04分発行